

報概調查掘試跡遺崎遠分下

1 9 8 7 . 3

會員委員會町美我香



Cトレンチ 編物出土状況



Aトレンチ SD3. SK3

序

香我美町はかつて大忍庄とよばれ、中世史跡の宝庫として文化財の保護に格別の努力を重ねて参りました。

この度懸案の山南地区におきます県営圃場整備事業が承認され町民待望のうちに、10カ年にわたる実施の計画が完了し、事業の着手の時機を迎えました。

工事施工に先立ち調査の結果、工事対象地区内である下分遠崎地区に、数多くの埋蔵文化財の所在が予見され、本格的調査に先立ち遺跡の範囲、性格を把握するための試掘調査を行いました。試掘の結果、弥生前期末から古墳時代にかけての集落遺跡が発見され、粘土性土質と相まって、極めて良好な形で保存されていました。当時の住居・食生活・農耕・信仰等古代人の営みが推察可能な資料として、極めて意義あるものと確信致します。

本書は、昭和61年度実施した発掘調査をまとめたものです。広く一般に活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に調査にあたって懇切な指導を戴きました文化庁、高知県教育委員会なかんづく高橋啓明・出原恵三両調査員の先生方並びに、調査に御協力を頂いた地権者の方々に心からお礼を申し上げます。

昭和62年 3月

香我美町教育長 和田 和 夫

例 言

- 1 本書は、香我美町教育委員会が文化庁の補助事業として実施した、下分遠崎遺跡試掘調査概要である。
- 2 遺跡は、高知県香美郡香我美町下分遠崎に所在する。
- 3 調査対象面積は、90,000 m^2 であり、調査面積は 1,063 m^2 である。
- 4 調査は、香我美町教育委員会の依頼により、高知県教育委員会が行った。
調査員 高橋啓明（文化振興課社会教育主事）
“ 出原恵三（文化振興課主事）
調査顧問 岡本健児（高松短期大学教授）
事務担当 香我美町教育委員会
- 5 概報執筆は、高橋と出原が担当した。
- 6 木器・石器・自然遺物の材質鑑定等は、下記の方々をお願いした。
木器の材質鑑定 光谷拓実（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）
種子鑑定 粉川昭平（大阪市立大学教授）
花粉分析 山中三男（高知大学教授）
石材鑑定 川添 晃（高知県教育センター第一研究班長）
- 7 調査にあたっては、地元土地改良区、香我美町農林課、南国耕地事務所の全面的な協力を得た。
また、測量では小松幹典氏の協力を得た。記して深く謝意を表す。
- 8 本書は、概報であるため遺物については、ほとんど触れることができなかった。特にB・Cトレンチの出土土器については、すべて割愛せざるを得なかった。本報告に期待されたい。

本文目次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過	3
第Ⅲ章 調査の方法	5
第Ⅳ章 遺構と遺物	5
1 Aトレンチ	5
2 Bトレンチ	14
3 Cトレンチ	15
4 Dトレンチ	20
第Ⅴ章 ま と め	20
第Ⅵ章 下分遠崎遺跡の花粉分析(予報)	23

挿 図 目 次

- Fig 1 下分遠崎遺跡の位置と周辺の遺跡
- Fig 2 トレンチ位置図
- Fig 3 トレンチ詳細図
- Fig 4 Aトレンチセクション
- Fig 5 Bトレンチ平面図及びセクション
- Fig 6 Cトレンチセクション
- Fig 7 Dトレンチセクション
- Fig 8 Aトレンチ平面図1
- Fig 9 Aトレンチ平面図2
- Fig 10 Aトレンチ中層(VI、VII層)検出遺構平面図
- Fig 11 Aトレンチ下層(K層)検出遺構平面図
- Fig 12 Cトレンチ2・3区検出遺構平面図
- Fig 13 Cトレンチ9区 VI・VII層検出遺構平面図
- Fig 14 Cトレンチ8・9区 K層砥石群平面図
- Fig 15 Aトレンチ遺構図(SK1~6)
- Fig 16 Aトレンチ遺構図(SK8~10)
- Fig 17 Aトレンチ遺構図(SD2~6)
- Fig 18 杭列・柱根見通し断面図
- Fig 19 Cトレンチ遺構図(SK2~7、SD1~2)
- Fig 20 Aトレンチ出土土器実測図(SK3、9、SD1、2、3)
- Fig 21 Aトレンチ出土土器実測図(SD3、4、5、包含層第VII層)
- Fig 22 AトレンチVII、VIII層出土土器実測図
- Fig 23 AトレンチVII、VIII層 BトレンチSD、出土土器実測図
- Fig 24 土器文様各種拓本
- Fig 25 石器実測図
- Fig 26 木器実測図
- Fig 27 木器実測図

図 版 目 次

- PL 1 調査区全景
- PL 2 AトレンチⅦ層
- PL 3 AトレンチⅦ層・粘土出土状況
- PL 4 粘土堆積状況・SK 4 遺物出土状況
- PL 5 SD 3 遺物出土状況
- PL 6 SD 6 床面遺物出土状況及び完掘状況
- PL 7 AトレンチSD 2完掘・SD 4・SD 10遺物出土状況
- PL 8 AトレンチSK 4・SD 4 遺物出土状況
- PL 9 Aトレンチ柱痕
- PL 10 Aトレンチ
- PL 11 Aトレンチ遺物出土状況
- PL 12 A・Bトレンチ遺物出土状況
- PL 13 Aトレンチ遺物出土状況
- PL 14 Aトレンチ完掘状況
- PL 15 Bトレンチ遺物出土状況
- PL 16 Bトレンチ遺物出土状況・Cトレンチ1・2区完掘状況
- PL 17 CトレンチⅥ層完掘状況・Cトレンチ9・10区遺物出土状況
- PL 18 CトレンチⅧ層遺物出土状況
- PL 19 Cトレンチ
- PL 20 Cトレンチ
- PL 21 出土土器口縁部
- PL 22 土器文様及び紡錘車未製品
- PL 23 出土土器
- PL 24 出土土器
- PL 25 出土土器
- PL 26 出土土器
- PL 27 石包丁実測図
- PL 28 石鏃・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧
- PL 29 剣形木製品・陽茎・鋤先・弓・杵
- PL 30 SK 3 出土・ドングリ類・粃
- PL 31 石器拡大顕微鏡写真

第 I 章 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

下分遠崎遺跡の所在する香我美町は、東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のほぼ中央部、香美郡の南部にあり、県下最大の平野である高知平野の東端に位置する。同町は、北方には、国指定天然記念物・史跡の龍河洞の所在する三宝山山系があって、物部村、香北町、土佐山田町とそれぞれ接し、南方には、月見山山系を境として夜須町及び安芸郡芸西村に、また東側は月見山山系の北東延長上で安芸市と、西側は、野市町、赤岡町と接している。同町は北東から南西方向に狭長で、北東部は山間地域に、南西部は香宗川の氾濫原として形成された沖積平野に立地する低湿地で、初期の稲作農耕にとっては、地理的環境に恵まれた適地であったと言える。年平均気温は、約15～16度と温暖で、年間降水量は2,500ミリ～3,000ミリと、生活条件としては好適な地として知られ、昭和61年度より先端技術産業である半導体製造を行う三菱電気株式会社高知工場が、下分遠崎遺跡の南東約500メートルの所に操業を開始している。

(2) 歴史的環境

下分遠崎遺跡を含む周辺の遺跡からは、先土器時代の遺物は発見されていない。今次調査で発見された縄文時代晩期の土器片が、生活の営みを今日に伝える最古の遺物である。しかしながら一定の空間を領し、遺跡としての痕跡を示すようになるのは、弥生時代前期末頃と考えられる。しかも現段階においては、下分遠崎遺跡のみであり、6km西方の田村遺跡群に弥生時代前期初頭の集落が成立してから実に200年以上の年月を経ていることになる。この頃になると当地域は、香宗川と山北川とに深くかかわりを持ち、かつ両河川に規定されながら着実に地域社会を形成し始めていくのである。

中期後半に入ると、龍河洞式土器が出土している的場遺跡、太型蛤刃石斧が発見された棒ヶ谷遺跡が海拔30m前後を測る丘陵上に出現するようになる。この時期は、全県下の遺跡が高い所に移動する現象が見られるが、当地域においても例外ではないことを示している。立地転換の歴史的背景に大いに興味が惹かれるところである。

現状では後期前半の遺跡が欠如しているが、後半になると再び遺跡が増加するようになる。当遺跡の西隣にある東曾我遺跡、香宗川の河谷平野に沿って十万遺跡・河内遺跡・拝原遺跡が分布している。またこの頃になると香宗川上流の幅山遺跡、山北川上流の安弘遺跡には、壺棺を含む土壌墓が見られるようになる。これらの遺跡の周辺部の丘陵には、多くの墓址の存在が十分考えられる。

古墳時代に入ると、徳王子に中期に比定される徳善天王古墳が出現する。県下では、高岡山・曾我山古墳に次ぐ古いものであり、当地域の生産力の高まりと政治的成長を表徴するものである。以後、螢野古墳・赤坂古墳・幅山古墳が造営されつづけ、更に7世紀には徳王子古窯址群が営まれるなど安定した地域支配の行われたことが窺われる。

第Ⅱ章 調査に至る経過

香長平野東端部を北流する香宗川中流域の農地66ヘクタールを対象とした山南地区県営圃場整備事業は、農地の区画整理と道水路の系統的整備によって農地の集団化と利用増進を図り、農業生産力の増大と経営の安定と発展に寄与することを目的として計画された。すなわち、小区画農地など旧態依然の農業経営から脱却し、近代的農業へと転換させようとするものである。

一方、当事業対象地区内には、原始時代以来今日の山南を築き上げた祖先の営みの足跡ともいえるべき埋蔵文化財が確認されており、特に遠崎地区においては、県下でも数少ない弥生時代前期の遺物の散布が見られる。圃場整備事業が施行せられれば、現状は大きく変更され地下の埋蔵文化財も極めて甚大な影響を受けることは必定である。このような開発事業と埋蔵文化財の調和ある発展を期するために、文化財保護部局と開発部局とは協議を重ね埋蔵文化財の保存のために努めている。しかし、事業の施行上やむを得ず失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しなければならない。失われる遺跡の面積を最少限にとどめるためには、遺跡の現状を正確に把握することが最も重要なことである。その上で再度開発部局と協議を重ねなければならない。今次試掘調査は、遺物が最も多く散布していると考えられる下分遠崎地区の90,000㎡について、遺跡の性格、範囲、遺物・遺構の深度や残存の状況を把握する目的で実施するに至った。



Fig 2 トレンチ位置図

第三章 調査の方法

調査対象面積90,000 m^2 内を南北に走る町道前田一遠崎線を挟んで、東西両側に南北2本ずつ計4本のトレンチを設定した。道路以西の東西トレンチをAトレンチ(4 $m \times 54m$)、南北トレンチをBトレンチ(3 $m \times 70m$)、道路以东の南北トレンチをCトレンチ(3 $m \times 120m$)、東西トレンチをDトレンチ(4 $m \times 50m$)である。またDトレンチ東端以东の部分については、2 $m \times 2m$ のグリッドを6ヶ所に設定した。Cトレンチについては、2ヶ所の拡張区(21 m^2 、32 m^2)を設けた(Fig 2)。実際の発掘にあたっては、耕作土と床土をユンボを使って剥ぎ取り、それから下はすべて手掘りで行った。Ⅲ層より下は、極めて粘着力の強い粘土があり、調査の進捗を拒んだ。したがって各トレンチ共に、初期の目的を達成する範囲内で、無遺物層まで掘り下げずに調査範囲を広げた。

第四章 遺物と遺構

1 Aトレンチ

Aトレンチは、東西方向に走る4 \times 54 m のトレンチである。この中を4 m ごとの小区画に分けて、遺物の取り上げを行った。

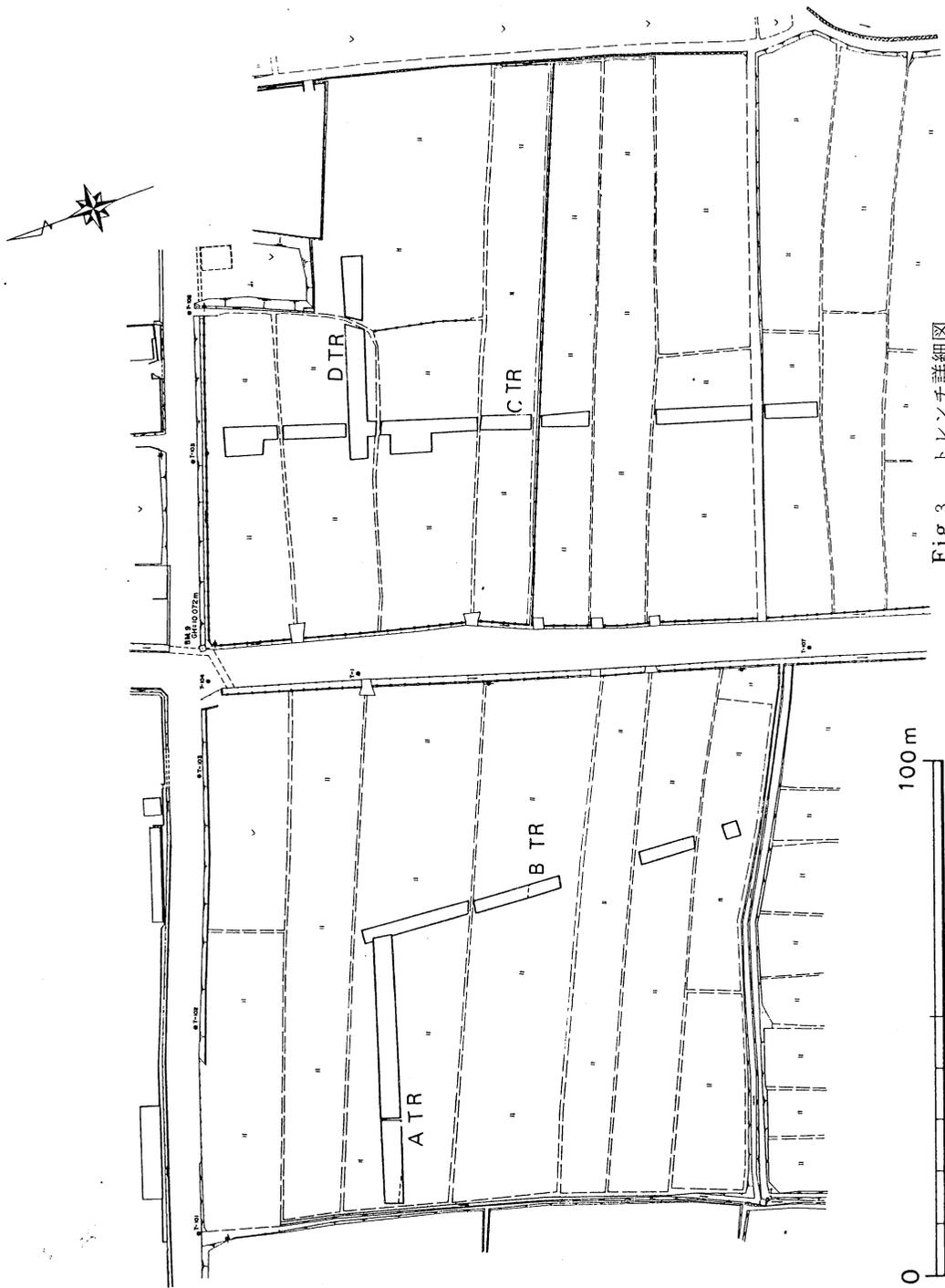
基本的な層序は、Ⅰ層～Ⅹ層に分けることができる。Ⅲ・Ⅳ層は近世の遺物包含層、Ⅴ・Ⅵ層は、弥生土器を多量に含んでいるが、古墳時代～中世の遺物包含層である。Ⅶ層は弥生中期、Ⅷ・Ⅹ層は弥生前期の遺物包含層であり、Ⅹ層は無遺物層である。全体的には安定した堆積をしているが、A-10～A-12の間は、Ⅶ・Ⅷ層を切るかたちでa～hの砂・砂礫が流れ込んでいる。このような砂礫の流れ込みは、A-13でも確認することができた。共に弥生中期の遺物を多量に含んでいるところから弥生時代中期におこった洪水のあとを示すものと考えられる。Ⅶ層から自然木や加工痕のある木材が出土しはじめ、腐食土状のⅧ層に到ると木材片の出土量が多くなる。しかしAトレンチからは、整った木製品の出土は見られなかったが、Ⅷ層で検出したピットからは、大小の柱痕が残っていた。A-6区以西は、遺物の出土が極端に少なくなり遺跡の西限を示すと考えられる。

(1) 杭列 (Fig 18)

A-1、A-2区のⅢ層で検出した。径3～5 cm 、長さ30～60 cm の杭を長さ5 m にわたって検出することができた。調査区を斜めに切っている。検出面より17世紀に属する唐津鉢の高台部が出土したことから、近世初頭の旧畦畔と考えられる。

(2) 土壌

SK1



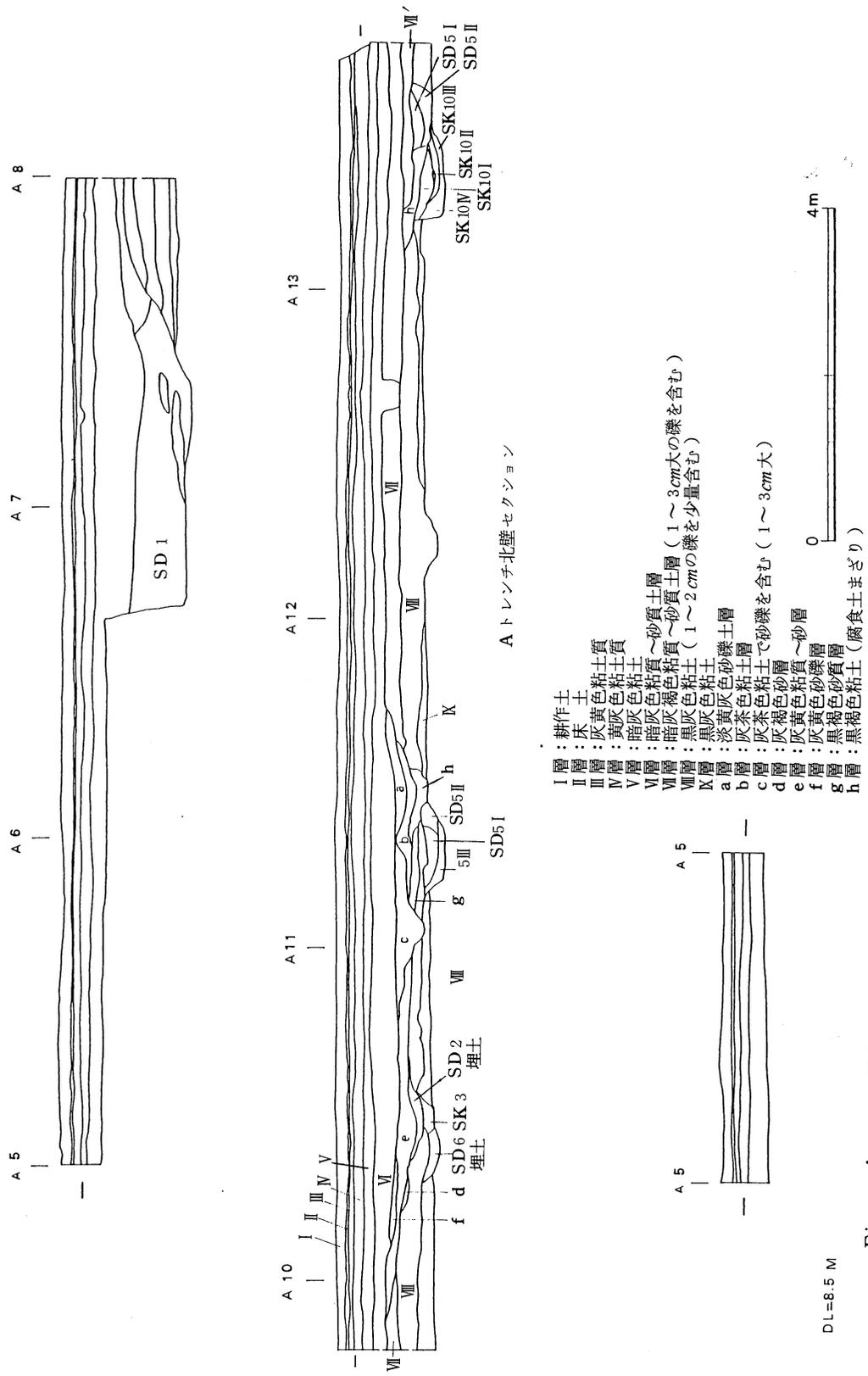


Fig 4 A トレンチ西壁セクション

A-9区で検出した。一部が調査区外に出ているが、長さ2.16m、幅1.22m、深さ10.8cmを測る。緑灰色砂質土層で、Ⅷ層から掘り込んでいる。前期土器細片40数点が出土しているが、1点流水文を有するもの(Fig 24-44)が出土している。

SK 2

A-13区にありSD4を切っている。楕円形のプランを呈し、長さ82cm、幅62cm、深さ7.2cmを測る。Ⅶ'層を掘り込んでおり、埋土は灰茶色粘質土層である。遺物は、壺形土器細片43点が検出でき、うち1点に楕円描文が見られる。SK2の床には、2~3cm大の円礫が敷かれている。中期の土壌である。

SK 3

A-10区にあり、中期の流路SD2の直下で検出された。溝状のプランを呈するが、一部調査区外に出ている。長さ2.04m、幅62cm、深さ7.8cmを測る。検出面には、オガクズ状の腐食土が薄く堆積しており、その下に炭化物やドングリ・粃がぎっしり詰まっていた。また土器片も多く壺形土器(1)、鉢形土器(2)の他底部、口縁部など190点の土器片が出土している。1は、口縁部がラップ状に開くタイプで、口縁部内面に粘土帯を貼付し鋤先状口縁をつくり出している。厚い口唇部は丸くおさめ、中央に1条の沈線をめぐらし、その上からハケ状原体による刻目を施す。頸部にも4条までヘラ描沈線を見ることができる。口縁部内外面は横方向のハケ調整・頸部外面はハケ調整を行う。淡黄色に発色し、胎土は0.5~2mmの砂粒を多く含む。鋤先状口縁を呈する壺形土器は、田村遺跡群で1点、柳田遺跡で1点出土しているのみで、本県では珍しいタイプである。2は、口縁部をつまみ出しによって如意形につくり出し、端部は横方向のナデ調整によって丸くおさめている。外面は縦方向のハケ調整、内面ナデ調整で仕上げている。紅く発色し、胎土は0.5~1mmの砂粒を含む。

SK 4

SK3と同じくSD2直下で検出された。溝状の土壌で半分以上が調査区外に出ている。長さ1.51m、幅70cm、深さ14.8cmを測る。検出状況及び内部の堆積は、SK3と同様であり、SK3と同じ性格を有するドングリ等の貯蔵用土壌と考えられる。前期土器片160点が出土している。

SK 5

A-12区で検出し、Ⅸ層を掘り込んでいる。北端でSK6に切られている。溝状のプランを呈する土壌で、長さ2.2m、幅85cm、深さ16.3cmを測り、床面南端に径12cm、深さ4cmの小ピットが存在する。埋土は、黒灰色単純一層である。遺物は、北端部より獣骨2点の他前期土器片45点が出土している。オガクズ状の腐植土や堅果類の堆積は見られなかったが、その形状からSK3、4と同じ性格を有する土壌であろう。

SK 6

A-12区で検出し、Ⅹ層を掘り込んでいる。楕円形のプランを呈すると考えられるが、一部が調査区外に出ている。長さ60cm、幅37cm、深さ20cmを測る。埋土は、灰黒色粘質土単純一層である。遺物は、前期土器細片29点が出土している。性格は不明である。

SK8

A-9区で検出し、Ⅹ層を掘り込んでいる。不整形のプランを呈し、長さ1.31m、幅81cm、深さ16.2cmを測る。埋土は黒色粘質土で、床に炭化物が薄く広がっている。出土遺物は見られない。

SK9

A-12、A-13区で検出し、Ⅹ層を掘り込んでいる。溝状の細長いプランを呈し、長さ4.59m、幅1.13mを測る。床面は段状に掘られており、南側が深く、北側が浅くなっている。28cmと8cmを測る。北側の床面には、径8cm、深さ6cmの小ピットがある。また南側の側壁には、径約40cmの柱根が残っているが、SK9との関係についてはわからない。埋土は黒色粘土層である。遺物は、南半分の検出面及び埋土上層から叩石1点、磨石1点、土器は図示したもの以外に前期土器片140点が出土した。埋土下層・床面からは、壺形土器(3)以外の遺物は見られない。上層出土の多量の土器は、SK9に伴うものではなく、SK9が埋没し自然の凹地となった段階で廃棄されたものである。3は、強く外反する口縁部で、口唇部は丸くおさめる。口縁部外面は横方向の強いナデ調整、頸部外面右下りのハケ調整で仕上げる。内面には指頭圧痕が見られる。4・5・6は、甕形土器である。4は、如意形に外反する口縁部で、口唇部は外傾する面をなし全面にヘラ原体で刻目を施す。淡灰茶色に発色し、胎土は0.5～2mmの砂粒を含む。5は、内湾して立ち上がる口縁部で、外面に断面三角形の粘土帯を貼付し、上下をつまんで横方向に強くナデる。端部は外傾する幅広い面をなす。口縁下にヘラ描沈線を4本まで認める。6は、逆L字口縁を有し、口唇部は丸くおさめ全面に刻目を施す。口縁下にしっかりしたヘラ描沈線を7条配す。沈線は右→左へ一気に描いている。外面は縦方向、内面(上胴部)は横方向のハケ調整で仕上げる。焼成は堅緻で紅く発色する。

SK10

A-13区で検出し、Ⅹ層を掘り込んでいる。SD4に切られている。楕円形のプランを呈すると考えられるが、約半分が調査区外に出ている。長さ90cm、幅49cm、深さ23.1cmを測る。西壁は急角度で立ち上がるが、東肩は緩やかに立ち上がる。埋土は、Ⅰ層：暗灰色粘質土、Ⅱ層：腐植土、Ⅲ層：炭化物、Ⅳ層：暗灰褐色腐植土～粘質土層である。遺物は、獣骨、壺形土器底部など前期土器6点が出土している。

(3) 溝

SD1

A-7、A-8区で検出し、Ⅶ層を掘り込んでいる。調査区を南北に切る大溝で、幅は4m以上、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色の腐植土層で、ところどころ砂礫層が入っている。遺物は、弥生土器の

他に古式土師器、床面からは自然の流木等が出土している。8はラッパ状に外反する弥生中期の壺形土器である。外面は縦方向のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整を施す。口唇部は、横方向のナデ調整により外傾する面をなす。口縁部外面は、横方向のナデによってハケ調整を消している。口縁部内面→外面へ貫通刺突文を配す。頸部に3条単位の櫛描直線文1帯と扁平な刻目突帯を1条確認することができる。淡黄茶色に発色し、0.5～2mmの砂粒を多く含む。胎土には、火山ガラス、銀雲母が混入している。9も弥生中期の壺形土器口頸部である。緩かに短く外反する口縁部を有する。口縁部外面に幅1.3cmの粘土帯を貼付している。口唇部は、外傾する面をなし下端にハケ原体による深い刻目を施す。頸部外面には縦方向のハケ調整を施す。頸胴部間には、ハケ原体による刺突文を巡らし、その上に2条の細いヘラ描き沈線を配して、文様帯を造り出している。外面は全面がススけている。11も壺形土器で、肩の張った上胴部に緩やかに外反する口縁部がついている。口唇部は、ナデ調整により丸くおさめる。口頸部外面は、縦方向のハケ調整で仕上げる。淡紅色に発色し、胎土に0.5～2mmの砂粒を多く含む。10は、布留式併行期の小型壺形土器である。口縁部は直線的に外方に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。胴部内面は左上りのヘラ削りを施す。淡灰黄色に発色し、1～2mmの砂粒を少量含む。

SD 2

A-10区で検出し、Ⅷ層を掘り込んでいる。調査区を横切る溝で、平面では、2条の溝が併行しているように見えるが、検出面では1条の溝であり、砂が詰まっているところから自然流路の可能性もあり、1条の溝として把握した。SD 2の埋土のd層上に堆積しているe層(灰黄色粘質～砂層)も一連のものの可能性がある。幅は1.49m、深さ約15cmを測る。埋土中には、図示したもの以外に750点の前期、中期の土器片が出土している。この中には、いわゆる薄手式土器と呼ばれるものが9点入っている。また扁平片刃石斧の基部も出土している。

12は中期、13は前期の壺形土器である。12は、半球形をなす上胴部で上端に刺突文と双線による波状文を配している。内面には指頭圧痕が見られる。淡紅色に発色し、胎土に0.5～2mmの砂粒を多く含む。13は、あまり発達しない胴部から緩やかに外反する口頸部を有する。口頸部内面は横方向、頸部・胴部外面は縦方向のハケ調整を施す。口縁部外面には幅1cmの粘土帯を貼付し指頭で押圧しているが、その際についた爪痕が残っている。口唇部は横方向の強いナデにより外傾する面をなす。頸胴部間に3条のヘラ描き沈線を配す。

SD 3

A-10区のSD 2直下で検出した。SK 3、4と並行しているが、SD 3の方が若干新しいと考えられる。確認できた長さは、3.61m、幅58cm、深さ18cmを測る。埋土は灰黒粘質であるが、下層には、1cm程の厚さで腐植土が堆積している。遺物は、100点以上の土器と下層より木片が出土している。土器は1点櫛描波状を認めたが他はすべて前期土器片である。14・15は共に前期土器である。14は、下膨れしたイチジク状の体部である。外面は縦方向のハケ調整後上半にヘラ磨きを施す。内面は胴部中位に指ナデと指頭圧痕があり、上胴部には横方向のハケ調整。外面は上から下へ3条

→4条→5条のヘラ描沈線を配し、4条と5条の沈線帯の間には双線による山形文が見られる。15は、ラップ状に大きく外反する口縁部である。口唇部は凹状を呈し上下端に刻目を配す。口縁部内面に3条の扁平な突帯を巡らし、貫通刺突文を一例配する。頸部には扁平な刻目突帯を5条巡らし、突帯間には各3条づつのヘラ描き沈線を配する。

SD4

A-13区で検出し、Ⅷ層を掘り込んでいる。SK10を切り調査区に直交するかたちで走る。北半分が2段に掘り込まれており、深さは16~36cmを測る。幅は1.4~1.8mである。検出面には炭化物が一面に広がっていた。その下に灰色荒砂層と暗灰色粘土が堆積している。遺物は、図示したもの以外に530点の前期土器片、床面からは、板状・棒状の木片が多量に出土した。また壺形土器片の内側には、黄色を保った朶が付着した状態で出土した。SD4は洪水によって埋没したものと考えられる。

16は、前期壺形土器の頸部である。外面縦方向、内面右下りのハケ調整を施す。外面には、5条の扁平な刻目突帯を有し、突帯間には4条のヘラ描き沈線を配す。各沈線は右まわりに一気に描いている。内面には断面三角形の刻目小突帯を貼付する。淡茶色に発色し、胎土はチャートを多く含む0.5~2mmの砂粒が多量に入っている。17は、なめらかに外反する甕形土器の口縁部で、端部に折り曲げによる刻目突帯を有する。刻目は半截竹管状のもので施文している。拗黒色を呈し、従来の薄手式土器胎土である。18は、甕形土器底部である。外面縦方向、内面は左上りのハケ調整を施す。二次的な熱を受けて紅く変色している。

SD5

A-11区で検出し、Ⅸ層を掘り込んでいる。調査区に直交する溝で、幅1.11m、深さ13~20cm、を測る。埋土は、Ⅰ層：黒褐色腐植土、Ⅱ層：黒色粘土、Ⅲ層：黒褐色粘土~腐植土である。遺物は、壺形土器(19)、甕形土器(20・21・22)の他前期土器片70点が出土した。19は、直立した長い頸部から口縁部が強く外反する。口縁部内面横方向、外面縦方向のハケ調整を施す。頸部に3条の扁平な突帯を貼付し、指頭でつまみ刻目風に仕上げている。突帯間には、3条のヘラ描沈線を配している。ヘラ描沈線は、1条のみ2回で描いているが他は時計まわりに一気に描いている。またわずかに肥厚した口唇部には、ヘラ原体による深い刻目を施している。20は、なめらかに外反する口頸部である。口唇部は外傾する面をなす。内面は左上り、外面は縦方向の荒い木理のハケ調整を施す。暗灰色を呈し、胎土中に火山ガラスを含む。外面は全面ススけている。21は、上胴部から頸部に向けて一旦すばまり、口縁部はなめらかに外反する。口縁部内外面は横方向のナゲ調整、口唇部は外傾する面をなし刻目を施す。頸部外面には縦に双線を4条1単位で配し、その下にはヘラ描沈線を6条巡らす。ヘラ描沈線帯の上下では、ハケ調整の方向が異なり、沈線帯より上は縦方向、下は左上りである。外面は全面ススけており、下半は熱により変色剝離している。22は、直線的に立ち上る上胴部から口縁部は如意形に外反する。口唇部は丸くおさめ全面にハケ原体による深い刻目を施す。口縁部外面は横方向のナゲ調整、内面は横方向のハケ調整、胴部内面は木理の細いハケ原体による

調整、外面上半は右上り、下半は左上りのハケ調整を施す。上胴部外面に8条のヘラ描き沈線、その下に列点文を配す。淡黄灰色に発色し、胎土には0.5～2mmの細粒を多く含む。

SD6

A-10区で検出し、K層を掘り込んでいる。SK3、4に一部重なるかたちで、調査区を縦に切る。幅は57cm、深さ14.5cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。遺物は、前期土器片80点の他床面からは、棒・板状の木製品が出土している。

(4) 土器製作用粘土 (Fig 9・18)

A-9区、Ⅶ層中で3ヶ所、A-12区、Ⅶ層中で1ヶ所、土器製作用と考えられる粘土の広がりを検出した。M1は不整形のプランで長さ70cm、幅25cm、M2は径30cm、M3は径40cmの広がり、厚さは、1～3cmである。M4は径50cmで、Fig 18に示すとおり漏斗状の堆積をしている。これらの粘土は、周囲のものとは全く異なり、明茶色に発色し混和材の砂粒やシャーロットを含んでいる。この付近に土器製作・焼成場のあったことをうかがわしめるものである。また包含層出土土器の中には、海綿状になったものもあり、やはり焼成場が近くにあることを暗示している。

(5) 柱穴 (Fig 11)

大小多量の柱穴を検出したが、調査面積が限定されているために、具体的にどのような建物あるいは構造物が建つのかは不明である。わずかにA-12区の柱根2、P32、P33が並ぶ程度である。柱穴の中には、柱根の残るものも多く、見通し断面図に示したもの以外にも10数本残っている。大きいものは、柱根1 (Fig 18)の径23cmや柱根4の約40cmを測るものがある。1は、一部面取りを行い、刃部幅3.5cmのノミ状加工の削痕が見られる。

(6) 包含層の遺物

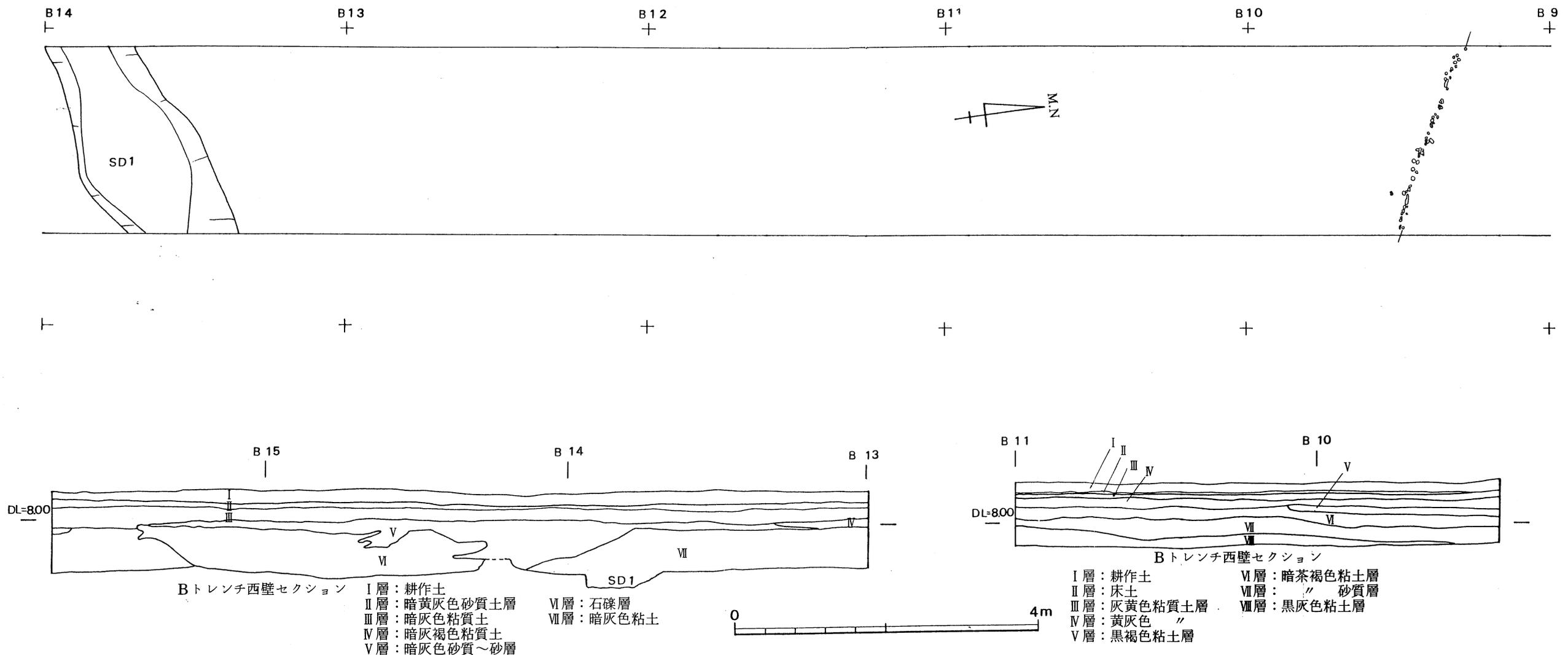
① 土器

② Ⅶ層

壺形土器 (Fig 20～22・23・24・26～29・32・33)

23・24は、A-11区から蓋形土器(25)と共に集中して出土した。24は、長胴の壺形土器で口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめ、下半に刻目を施す。頸部外面縦方向・胴部外面左上りのハケ調整を施す。内面では粘土帯の接合部が観察できる。接合部には指頭圧痕が顕著に見られる。頸胴部間には、ハケ原体による列点文を配し、その上にヘラ描波線を1条巡らす。

23は、口縁部に1.2cm幅の粘土帯を貼付。口唇部は外傾する面をなし、ヘラで×を施す。頸部下端に4条のヘラ描沈線を配す。ヘラは始めから終わりまで一気に引いている。26～29も口縁部外面に粘土帯を貼付するタイプである。口唇部は、26が外傾する面をなし、他は凹状をなす。27・28は口唇部下半に、26は全面に、29は上下に刻目を施す。また27～29は頸部下端に列点文を配している。共に外面縦方向、内面横方向のハケ調整を施す。32・33は底部である。共に円盤貼付は見られ



Bトレンチ西壁セクション

- | | |
|--------------|------------|
| I層：耕作土 | VI層：石礫層 |
| II層：暗黄灰色砂質土層 | VII層：暗灰色粘土 |
| III層：暗灰色粘質土 | |
| IV層：暗灰褐色粘質土 | |
| V層：暗灰色砂質～砂層 | |

Bトレンチ西壁セクション

- | | |
|--------------|--------------|
| I層：耕作土 | VI層：暗茶褐色粘土層 |
| II層：床土 | VII層：砂質層 |
| III層：灰黄色粘質土層 | VIII層：黒灰色粘土層 |
| IV層：黄灰色 | |
| V層：黒褐色粘土層 | |

Fig 5
Bトレンチ平面図及びセクション

ない。

蓋形土器 (Fig 21-25)

頸部は、わずかに内湾気味に下降し、口縁部は大きく外反する。内外面へラ磨き調整。紅く発色する。

甕形土器 (Fig 22・23-31・36・37)

A-11区出土である。わずかに張った胴部から頸部が短くすぼまり、口縁部は緩やかに外反する。口縁外面には粘土帯を貼付し、口唇部は凹状をなす。断面に粘土帯接合痕を認める。口頸部外面ナデ調整、胴部外面は左上りのハケ調整を施す。淡黄褐色に発色する。36は、縄文晩期の深鉢に器型の系譜を求めることができる。わずかに張った胴部から直線的に頸部が立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。胴頸部間に4条のへら描き沈線を配し、それより上は縦方向のハケ調整、下は擦痕をイメージする荒いナデ調整である。粘土帯接合部を2ヶ所観察することができる。胎土には、火山ガラスを多く含む。外面は全面ススけている。37は、底部である。

⑤ VII層 (Fig 23-34・38~42)

甕形土器のみを掲載した。38・40は、前期末に一般的に見られるものである。34・39・41はVII層の36と同様に縄文晩期に系譜をもとめることができるものである。34は、口縁部外面に横方向の強いナデ調整を施す。頸胴部間には、列点文を連続させ沈線状を呈するもので、この文様帯より上はハケ調整を施すが、下はナデ調整である。39は、上胴部に3条、口縁部に1条の微隆起帯を貼付している。共に貼付後指でつまんでいるが、胴部最下の微隆起帯には、爪の痕が付いている。文様帯の上下で調整が異なり、口頸部外面は縦方向のハケ調整、下半はナデを行う。口頸部内面は、横方向のハケ調整を施す。41は、肩が張るタイプで最大径を上胴部に有する。口縁部外面に2条、上胴部に4条の微隆起帯を39と同様の手法で貼付している。胴部文様帯より下は、擦痕をイメージさせる荒いナデ調整を施す。0.5~2.0 mmの砂粒を含み、淡茶色に発色する。42は、強く張った上胴部から頸部が内側に直線的に立ち上がり、口縁部は丸く外反する。いわば遠賀川系統の甕と縄文晩期系統のものとの折衷的なタイプである。口唇部は凹状をなし、わずかに上に肥厚している。上胴部に3条の太いへら描沈線を配す。口縁部内外面横方向の強いナデ調整、頸部・胴部外面は縦方向、頸部外面は横方向のハケ調整を施す。胴部内面には著しい指頭圧痕が見られる。0.5~2 mmの砂粒を含み、淡灰色に発色する。

② 石器

④ 石包丁 (Fig 25-10~12)

この3点は、A-8区Ⅹ層上面から共に近接して出土した。9は刃部の一端を欠損している。長さ10.7 cm、幅4.4 cm、厚さ0.7 cm、重さ70 gを測る。台形のプランを呈し、直線刃片刃で幅5 mmの刃部をつくり出している。中央部に2孔を穿っているが、片方の孔の下に未穿孔痕が見られる。緑色変岩である。11は、長さ13 cm、幅4.8 cm、厚さ0.75 cm、重さ90 gを測る。隅丸長方形のプランを呈し、直線刃片刃で幅6 mmの刃部をつくり出している。刃部には全面に横方向の擦痕が見られる。

紐孔は、刃部に面して(表面)やや左よりに2孔を穿っている。両側から穿っているが孔周辺には、叩打痕がある。千枚岩である。12は、長さ15.3 cm、幅4.4 cm、厚さ0.8 cm、重さ100 gを測る。隅丸方形のプランを呈し、直線刃片刃で幅1 cmの刃部をつくり出している。刃部には全面に横方向の擦痕が見られる。紐孔は、刃部に面して(表面)左よりに2孔を穿っている。裏面の片孔ぎわに未穿孔痕が見られる。粘板岩である。以上の3点は、前期末に属する。

この他にもA-11Ⅶ層より未製品が1点出土している。

⑥ 扁平片刃石斧 (Fig 25-6・7・9)

6は、A-13区Ⅷ層出土で、基部の一部が欠損している。長方形のプランを呈し、長さ4.05 cm、幅3 cm、厚さ0.8 cm、全面研磨しているが、後主面には剝離が見られる。アルカリ角閃石岩である。7は、A-9区Ⅷ層出土で、刃部が最も広く、基部に向って狭くなっている。長さ5 cm、幅3.1 cm、厚さ1 cm、重さ22 gである。全面を丁寧に研磨しているが、両主面共に剝離痕がみられる。刃部は幅1 cmでつくり出しているが、中に稜線が入る。また刃部先端部に使用による条線が見られる。粘板岩である。9は、A-8Ⅵ層出土で、最大幅を刃部に有し、基部に向って狭まっている。刃部は丸くおさめる。長さ6.7 cm、幅3.2 cm、厚さ1.1 cm、重さ35 gを測る。両刃風片刃である。緑色変岩である。

2 B トレンチ (Fig 5)

B トレンチは、南北方向に走る3 m×70 mのトレンチで、遺跡の南限を確認するために設定したトレンチである。A トレンチと同様に4 mごとに小区画を設け、遺物の取り上げと基本層序の観察を行った。B-9からB-15までは、弥生時代の包含層と一部無遺物層まで掘り下げたが北部については、包含層(Ⅳ層)が出た段階で止めた。

B-9、10とB-13~15では、基本層序が異っている。すなわちB-11以北は、A トレンチとほぼ似た堆積を示しているが、B-14以南になるとⅣ層以下が砂礫層となっている。おそらくこのあたりから香宗川に向っては、近世以前は一面の氾濫原であったと考えられる。B-9、B-10ではⅣ~Ⅷ層が弥生時代前期~中期の遺物包含層であり、B-13区ではⅣ、Ⅴ層が古墳時代、Ⅶ層が弥生時代の遺物包含層であるが、遺物の量は極端に少なくなっている。Ⅷ層は無遺物層である。

(1) 杭列 (Fig 18)

耕作土を除去した段階で検出できた。B-9区を斜めに切っている。A-1、2区で検出したものと同じ性格のものと考えられる。

(2) 溝

SD 1

SD 1は、B-13区で検出し、Ⅷ層を掘り込んでいる。幅1.1~1.6 cm、深さ20~30 cmを測る。埋土は黒褐色の腐植土がたまっている。床面には多量の棒、板状の木製品や自然木が見られた。検出面及び埋土中

から 200 点近い土器片が出土した。これらの中に 1 点中期土器が見られ、他はすべて前期のものである。35 (Fig 23) は、半球形の胴部をもつ壺形土器で、短い頸部から口縁部が強く外反する。口縁外面には断面楕円形の厚い粘土帯を貼付している。口頸部内面は横方向のハケ調整、外面は縦方向のハケ調整後ナデ調整で仕上げている。砂粒をあまり含まない精選された胎土を使っている。淡灰色に発色する。

(3) 包含層の遺物 (Fig 22、23)

30 は、B-9 区 VII 層から出土した甕形土器である。縄文晩期的なプローションを有す。口唇部には、端部つまみ出しの際についた爪痕が見られる。口頸部内面は擦痕状のナデ、下胴部内面には上→下のヘラ削りが認められる。口頸部外面は横方向のナデ調整、胴部外面は左上りのヘラ磨きを施している。0.5 ~ 2 mm の砂粒と火山ガラスの微粒を含む。外面は全面ススけており、下胴部は熱によって剝離赤変している。

13 は、B-13 区 V 層で出土した木製椀である。口径 12cm を測る。

3 C トレンチ (Fig 14)

C トレンチは、南北方向に走る 3 m × 120 m のトレンチで、B トレンチと同様に遺跡の南限を確認するためのものである。4 m ごとに小区画を設け、遺物の取り上げと基本層序の観察を行った。C-1、2、3、9、10 区については、無遺物層まで掘り下げたが、他の部分は包含層面で止めた。また C-1、2、9、10 区は、西側に拡張区を設けた。

トレンチ北部の C-1、2 区では、V 層から弥生時代中期の遺物包含層がはじまり、VII 層の黄灰色シルト層の地山面が中期の遺構検出面となっている。検出面の海拔高は 8.45 m 前後であり、A 区の中期遺構検出面と比較すると 20~30 cm ほど高くなっている。また C-1、2 区は、A・B 区のようにグライ土壌化していない。しかし南へ下ると様相は異ってくる。すなわち、C-9、10 区では、中期の包含層である VI 層からグライ土壌化が始まる。C-9、10 区は、VI、IX 層が中期の遺構検出面であり、土塊、柱痕等が検出された。しかし VI、IX 層は、C-10 区の北部で下降消滅し低みをつくっている。そしてこの低みの上に、多量の木器、自然木、堅果類を含んだ VIII、VIII'、X 層が堆積し、柵み状を呈している。この地点での中期遺構の検出面は、C-1、2 区と比較すると 20~30 cm 低く、A トレンチの検出面とほぼ同レベルである。

C-22 区で、IV 層以下が腐植物を含んだ泥土となっており、遺跡の南限を示している。

(1) 土塊

SK 1

C-1 の北端で検出し、VI・VII 層を掘り込んでいる。SK 4 と切り合っているが、先後関係は不明である。東壁側が張り出し段状に掘り込まれている。長さ 2.1 m、最大幅 1.31 m、深さ 20 cm を測る。床面南端部と北壁に径 10 cm、深さ 10 cm の小ピットが存在する。埋土は黒褐色粘質土である。埋土中より弥生中期土器細片が多く出土している。

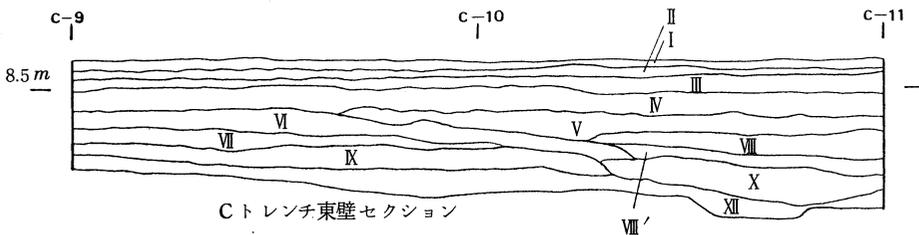
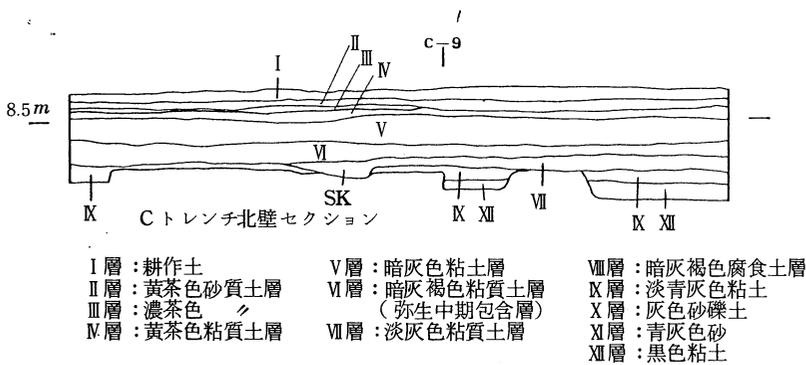
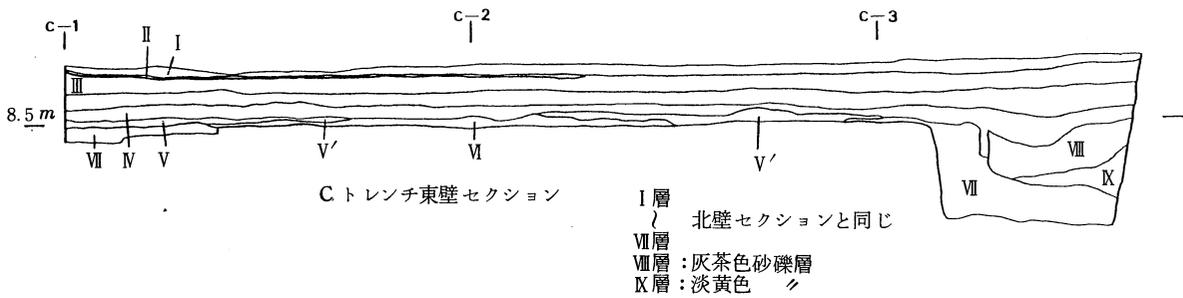
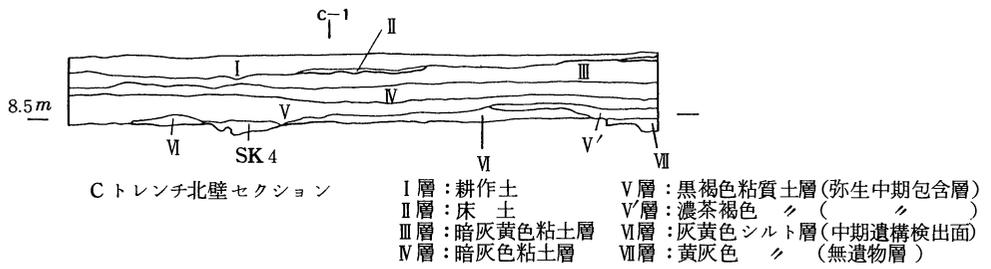


Fig 6 Cトレンチセクション

SK 2

北端部をSK 1に切られているが、不整楕円形のプランを呈すると考えられる。長さ 1.4 m、幅 1.1 m、深さ 12cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土である。遺物は、小型完形壺形土器を含む多量の中期土器細片が出土した。

SK 3

SK 2と切り合っているが、先後関係は不明である。不整形のプランを呈し、長さ 1.9 m、最大幅 1.4 m、深さ 3～10cmを測る。埋土は濃茶褐色粘質土である。遺物は弥生土器細片が数点出土した。

SK 4

大部分が調査区外に出ており、一端がSK 1と切り合っている。Ⅵ・Ⅶ層を掘り込んでいる。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は見られない。

SK 5

C-9 拡張区で検出し、Ⅹ層を掘り込んでいる。大部分が調査区外に出ているために形態や規模は不明であるが、深さ 40cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器を少量含む。

SK 6

C-9 区で検出し、Ⅶ層を掘り込んでいる。円形のプランを有し、径 70cm、深さ 8cmを測る。埋土は黒色粘土で、遺物は見られない。

SK 7

C-9 拡張区で検出し、Ⅹ層を掘り込んでいる。大部分が調査区外に出ているために、形態や規模は把握できないが、深さ 5cm内外の浅い土壌である。埋土は、黒色粘土である。遺物は見られない。

(2) 溝

SD 1

C-1、2区で検出し、Ⅶ層を掘り込んでいる。北に向って逆L字状を呈する細い溝である。延長 6.2 m、幅 20cm、深さ 20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は認められなかった。

SD 2

C-9 区で検出し、Ⅶ層を掘り込んでいる。東西に走る細い溝で、西端部はつかむことができたが、東は調整区外に出ている。幅 30cm、深さ 10cmを測る。埋土は黒色粘土である。遺物は見られない。

(3) 砥石群 (Fig 18)

C-9・10及びその拡張区K層上面からは、大小の砥石が集中して多量検出された。この砥石群の中には、大型蛤刃石斧用のものもあり、石器研磨作業場として把握することができよう。しかし石器未製品や研磨以前の石器を発見することはできなかった。

(4) 包含層の遺物

Cトレンチからも多量の土器・石器・木器・堅果類・種子・編物等が出土しているが、当概報では多くを割愛せざるを得ない。ここでは、石器・木器・編物について若干の紹介をするにとどめる。

① 石器 (Fig 25)

石鏃：5点出土している。すべてサヌカイト製である。基部はすべて凹基式であるが、2は平基式に近い。1以外は、両主面に主剝離面が残る。

No	長さ cm	厚さ cm	幅 cm	重量 g	断面形
1	2.9	0.4	1.8	1.7	平行四辺形
2	2.25	0.35	2.0	1.8	六角形
3	2.3	0.4	1.6	1.2	平行四辺形
4	2.7	0.5	2	2.6	〃
5	2.2	0.3	2.0	1.45	六角形

大型蛤刃石斧(8)：C-10区X層から出土した。基部が欠損しているが、最大幅を刃部からやや基部よりのところに有する。刃部には、横方向の研磨擦痕が頭著に見られる。断面形は楕円形を呈す。みかぶ緑色岩製である。

石器は、これらの他に石包丁2点、叩石・砥石が多く出土している。

② 編物(巻頭カラー下段)

C-10区K層で検出した。2枚が近接して出土し共に葦製で一辺50cm前後を測る。

③ 木器(Fig 26、27)

C-10区及びその拡張区のⅧ、Ⅷ'、X層から多量の自然木と共に出土した。農耕具・工具・祭器等がある。完形品や用途の判明するものと共に、加工痕のある板状、柄状、棒状のものも多い。これらの木器は、出土状況・遺存度から考えて廃棄されたものが柵み状に堆積したものと考えられる。

木器観察表

№	種	種類	材	質	長さcm	幅cm	厚さcm	特	徴	
1	鋤	先	アカガシ亜属		39.6	6.1	1.0		片方の歯部が根元から欠損している。削り加工痕が、根元→先方向にみられる。	Cトレンチ10区 Ⅷ層
2	"	"	"	"	9.7	9.2	1.7		鋤先の肩部の欠損品である。内外面に加工痕が見られる。	"
3	"	"	"	"	20.0	4.0	1.7		柄部の一部と歯部の一部である。肩部に削り加工痕が見られる。	Cトレンチ10区 X層
4	着	柄 鋤	"	"	29.0	15.0	2.4		中央部に2.2×2.4×1.6cmの5角形の着柄孔が穿たれている。高長側縁に0.4×0.2cmの堤を造り出している。	"層 Ⅷ層
5	柄	状 木 器	シイノ木属		29.4	4 径 3.5			握り部は、丸く、身部は7角に面取っている。	"層 X層
6	杵		ヒノキ?	18.8 搦部					搦部の欠損品である。握部に近いところは、削り痕が残るが、頭部は使用により磨耗している。	"
7	鋏		アカガシ亜属						平鋏の台部に、柄が着装されている。着装孔は、3.5×1.9cmの楕円形。	Cトレンチ10区 X層
8	杵		ヒノキ?	18.5 搦部					搦部と握部の欠損品である。	"層 Ⅷ層
9	石	斧 台	アカガシ亜属						太形蛤刃石斧の台部である。石斧装入部は、平滑に仕上げている。	"層 X層
10	陽	茎	ヤナギ属		16.2	1.6			縦に割れているが、破損部にも磨耗が見られる。	"層 Ⅷ層
11	弓		広葉樹不明			2			溝が走るタイプである。基部に桜の皮をまいている。	"層 X層
12	柄	部	アカガシ亜属		46.2	径 3			先端部は、扁平に仕上げる。基部には、削り痕がみられる。	"
13	椀		広葉樹不明						口径12cmを測る。端部を丸くおさめる。	BトレンチV層

4 Dトレンチ (Fig 7)

Cトレンチに直交するかたちで東西方向に設定した。幅4m、長さ50mで、遺跡の東限を把握するためのものである。他のトレンチ同様4mごとに小区画を設け、D-9、10区で無遺物層(K層)まで下げた。V層以下がグライ土壌化しており、VII、VIII層が弥生土器包含層であるが他のトレンチと比べて遺物の出土量が極端に少ない。しかもD-10ポイントから1.4mのところまで包含層が消えている。このあたりが遺跡の東限と考えられる。

なおDトレンチの東方60mの地点に、2m×2mのグリットを3個その南140mの地点に3個のグリットを設けた。その結果G-2のV層(Fig 7)に弥生時代の包含層が見られた。

第V章 ま と め

今次試掘調査は、先にも記したように近い将来予定される本格的調査に先立って、遺跡の範囲、性格、深度等を把握するために行ったものである。A・B・C・D計4本のトレンチと6個の小グリット調査によって初期の目的を達成し得たと考える。すなわち西限はAトレンチ6区、南限はBトレンチの13区とCトレンチの22区を結んだライン、東限はDトレンチ10区と考えられる。北限については不明と言わざるを得ないが、県道野市一俣地線の北に位置する住宅地や香我美中学校校庭などは、立地から考えて当然その範囲内に入れることができる。

今次調査で検出された遺構は、近世の杭列、4世紀代と考えられる溝、最も多かったのは弥生時代前期、中期の遺構である。コンテナケース150箱にのぼる出土遺物もほとんどすべてが弥生時代のものであり、古墳時代～近世の遺物は数点にすぎない。またCトレンチから縄文晩期の突帯文土器が1点出土している。したがって下分遠崎遺跡は、縄文時代晩期頃から人々の生活の営みが見られ弥生時代前期末には、水稻農耕に基づいた生活が定着し集落を形成している。出土遺物、検出遺構から見ると、中期中葉頃までは継起的発展をしていることが窺われるが、中期中葉になると集落は消滅し、AトレンチのSD1が設けられるまでの300年間は、生活の跡を見ることができない。その後も古代・中世の遺構は全く認められず、近世の畦畔杭を待たなければならない。おそらく連綿として水田が営まれていたのであろう。また遠崎遺跡及びその周辺の地割を古代条里制に関連させている考え方があるが、今次調査においては、古代条里遺構に関係するような要素は全く認められなかった。

当概報では、遺物整理期間及び紙幅の制限があるために、調査成果の極一部しか明らかになし得なかったが、ここで弥生時代の遺構、遺物について若干の考察を行いたい。先述したように下分遠崎遺跡は弥生時代前期末に成立した集落遺跡であり、西方6kmに位置する田村遺跡群に前期初頭の農耕集落が成立してから実に200年余りの年月を経ている。高知平野中央部における弥生文化の成立・発展の様相は、田村遺跡群の調査によって飛躍的に明らかになりつつあるが、周辺の中・小平

野部に弥生文化が如何に浸透し定着して行ったかということは、ほとんど不明であると言わざるを得ない。かかる状況下において、今次試掘調査の成果は、極めて示唆に富む内容を含有していると言えよう。

1 遺物

(1) 弥生土器

最も注目すべきは、甕形土器である。すなわち遠賀川式土器、縄文晩期系土器及び両者の折衷タイプの三者が共存することである。口縁部に刻目突帯を有する17、上胴部、口縁部外面に微隆起帯を貼付させる39、41等は縄文晩期系の好例として挙げることができる。各タイプのパーセンテージは、本報告を待たねばならないが、見通しとして、縄文晩期系のものが、他二者に対して圧倒的に多い。あたかも福岡平野周辺地域における板付I式系土器に対する「亀の甲」タイプの関係を見て取るような現象を呈している。縄文晩期系のタイプは、以前においても高知平野周辺部で散見されていたし、田村遺跡群LOC 44・A区SD1から中期土器と共に極少数例が知られていたが、今次調査においてその実体が明らかになり、土器編年の中に系統的に位置づけることが可能となったのである。まさに縄文集団の弥生化へのプロセスを体現する土器である。このような複雑さは、甕形土器のみに現われているのではない。壺形土器における文様の煩雑さや、櫛描文の原理を逸脱したところに成立したと考えられる櫛描直線文と縦方向のヘラ描き沈線の同一個体における共存などを挙げるができる。

今一つ注目すべき現象は、壺形土器・甕形土器において、西部瀬戸内地方の阿片・片山式土器そのもの、あるいはその系統の土器が、田村遺跡群と比較して目立って多いことである。このことと前述の現象とが如何なる関係にあるのか、今後追求して行く課題である。

(2) 石器

大陸系磨製石器は、柱状片刃石斧以外はすべて出揃っている。石包丁は未製品も含めて計9点、大型蛤刃石斧2点、扁平片刃石斧4点出土している。石材はすべて物部川水系を走る黒瀬川構造帯産出のものである。打製石鏃は5点出土しすべてサヌカイト製である。その他、叩石・砥石が数十点出土している。石器には、土器に見られたような複雑さは見られない。

出土状況では、Cトレンチの砥石群周辺から大型蛤刃石斧2点が出土しており、扁平片刃石斧の4点はすべて、遺構の多いAトレンチから出土している。本調査の際は、留意すべき事項である。

(3) 木製品・自然遺物

県下における弥生時代の木製品が出土したのは、今次調査が初めてである。いわば南四国における弥生時代の木器が初めて明らかとなったと言えよう。図示して紹介し得たのは、極一部である。A～Cのトレンチから出土しているが、農耕具・工具などの製品や欠損品が出土したのはCトレンチ10区のⅧ、Ⅷ'、X層の柵み状のところである。農耕具では、着柄鋤、二又鋤、鋤がある。これらはすべて樫材でつくられている。脱穀具として杵、工具としては、大型蛤刃石斧台、

横斧用柄部が見られる。11の弓は、一面に樋の通る木弓で端部には桜の皮を巻きつけたものが残っている。このような生産用具のみでなく精神生活を窺わせる陽茎が出土している。これらの製品の加工痕は、鉄器によるものも多いが、用途不明の板材に穿たれた孔や縦長の板材を柱目に直交に截ち切り、あるいは自然木の截ち割りには明らかに石斧が使われている。

各種ドングリなどの堅果類の他種子類、ヒョウタン、粃が多量に出土した。中でもドングリ類の出土は多く、後述する溝状の土壌に詰まって多量に出土した。稲作が定着しているながらもなおかなりの部分自然植物に依存せざるを得ない食生活の実態を示している。このような自然遺物も木器と同様に、田村遺跡群の調査では得ることができなかったものであり、弥生時代の自然環境や社会を復元する上で貴重な資料となるものである。

2 遺構

今次調査では、住居址を検出することはできなかったが、弥生時代に属するものとして、溝8条、土壌17基、ピット多数を検出した。これらの遺構は、Aトレンチに集中しているが、これらの中で注目すべきものは、溝状をなすドングリが詰まった土壌である。SK-3、4、5が該当し、溝としたSD3もその可能性がある。先述したように、ドングリの上にはオガクズ状のものが被さっており、ドングリを保護する覆いと考えられる。このような状況は、土壌の形態こそ異なるが、岩田遺跡に見られる縄文晩期のドングリ土壌と類似している。

ピットは、柱根の残るものも多数検出されたが、調査区が現定されているために建物の構造や規模を明らかにすることはできないが、掘立柱住居か、柱根の大きなものは倉庫の可能性もある。ただドングリ土壌の近くに柱穴群があるのは、最近検出例の増加しつつある掘立柱建物に伴う溝状(船底状)土壌となる可能性があり注目される。

註1 『田村遺跡群』 高知県教育委員会 1986年

2 出原恵三 「高知市柳田遺跡について」 『土佐史談』171号 1986年

3 『香我美町史』 香我美町教育委員会

4 1に同じ LOC 44

第 VI 章 下分遠崎遺跡の花粉分析 (予報)

高知大学理学部生物学科 山 中 三 男

試料と分析方法

花粉分析用の試料は、下記の各層から 5~10cm の間隔で採取した。

第 I 層 (0~9 cm) …… 表層 (0 cm) および深さ 5 cm の層準。

第 II 層 (9~20 cm) …… 深さ 10、15 および 20 cm の各層準

第 IV 層 (20~34 cm) …… 深さ 30 cm の層準。

第 V 層 (34~48 cm) …… 深さ 40 cm の層準。

第 VII 層 (48~86 cm) …… 深さ 50、60、70 および 80 cm の各層準。

第 VIII 層 (86~129 cm) …… 深さ 90、100、110、120 cm の各層準。

第 X 層 (129 cm~) …… 深さ 130、140、150 および 160 cm の各層準。

上記の各層準から 2~3 g 程度の試料をとり、KOH-ZnCl₂-acetolysis 法によって処理を行い、プレパラートを作製した。

分析結果と考察

19 試料から検出した花粉・胞子は、木本花粉 34 種類、草本花粉 25 種類、シダ胞子 8 種類およびコケ胞子 1 種類である。その詳細は表 1、2 に百分率であらわした。この百分率計算は、高木花粉の総和を基本を基本数として行った。したがって多量に検出された草本花粉やシダ胞子では、100% を越える値になっているものもある。

主な木本花粉の変遷をみると、下層部から中層部にかけてはアカガシ亜属が優勢で、中層部ではヤマモモ属の優勢な層準もいくつかみられる。またシイノキ層も下層部で比較的高率で出現している。これらのことは、カシ類、ヤマモモおよびシイノキなどを主とする常緑広葉樹林が、比較的最近までこの地方に広くみられたことを示している。さらに下層部でツガ属の花粉が多量に出現するのが目につく。現在この遺跡の付近に自生のツガは全くみられない。おそらく、過去にはかなりの量のツガが生育していたが、最近になって消滅したものと思われる。なぜ消滅したのか、その原因は今のところはっきりしない。しかし人間の影響が関係しているように思われる。

深さ 110 cm の層準で「その他の針葉樹」が 40% 余の高い値を示す。今のところこの針葉樹の種類を正確に同定することはむずかしいが、花粉の形態からみて、イチイ、カヤあるいはイヌガヤの可能性が強い。

上層部ではマツ層が優勢になる。これは、それまで優勢であった常緑広葉樹の林が破壊されて、そのあとにマツ林が広がったことを示すものであろう。

草本花粉および胞子の変動をみると、シダ類の胞子が全層準で高い出現率を示しているのが目につく。とくに上層部でのウラボロ科の増加がいちじるしい。現在もこの地方の丘陵地のマツ林の下生えにウラボロやコソダの群落がみられることから、上層部でのウラボロ科の増加は、マツ林の拡

大と密接に関連しているものと思われる。

イネ属の花粉が最下層から、しかもかなり高率で出現している。このことは、この地方で集約的な稲作がかなり長期間連続して行われてきたことを示すものである。

花粉分析用試料とともに、下層部から多量の大型遺体も採取した。大部分は木の葉であるがその他に枝、果実、とげなどが含まれている。これらは目下研究中であるが、木の葉ではアラカンが非常に多く、その他にウラジロガン、イチイガンおよびツクバネガンなどのカン類やクスノキ科の葉もみつまっている。今後はこれら大型遺体の精査とさらに詳細な花粉分析学的研究を行って、植生と環境の変遷を追求するつもりである。

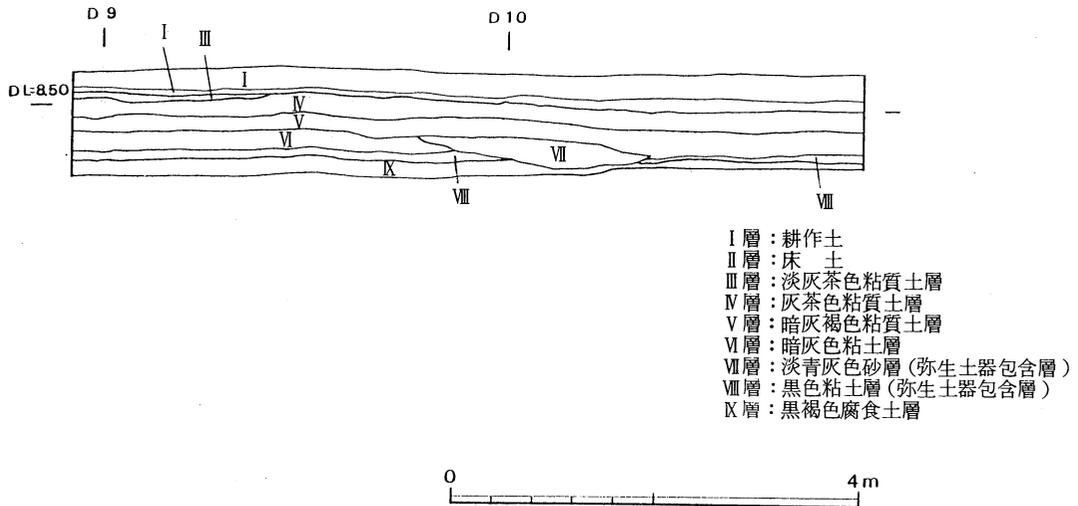


Fig 7 Dトレンチ北壁セクション

表2. 草本花粉および孢子の出現率

上段は試料を採取した層序 下段は深さ (cm)		I		II			IV	V	VII				VIII				X			
		0	5	10	15	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160
草 本 花 粉	検出した花粉の分類群																			
	Oryza (イネ属)	17.6	25.4	11.8	46.6	20.1	15.9	55.6	27.7	69.6	86.6	33.9	25.9	52.7	18.1	29.8	98.8	18.0	21.3	23.7
	Coix (ジュズダマ属)?				0.5								0.5	5.3	5.3	2.0	10.1			
	other Gramineae (その他のイネ科)	18.2	29.5	39.5	77.2	24.4	24.2	19.5	16.2	32.9	48.4	42.0	47.7	143.8	57.4	47.7	179.8	62.3	97.2	37.3
	Typha (ガマ属)						0.4	0.8	2.3	20.7		0.4		1.8	1.1	6.6		1.7	0.9	
	Sagittaria (オモダカ属)		0.4	2.6	1.5	1.0		1.6	1.2		2.8	2.7	3.0	5.3	6.4	5.3	7.7	5.0	16.7	15.3
	Potamogeton (ヒルムシロ属)								20.3	61.6	4.8	3.6		1.2	3.2				8.3	
	Sparganium (ミクリ属)																0.6			
	Cyperaceae (カヤツリグサ科)	1.7	4.5	3.9		0.5	0.8	1.6	2.3		2.0	2.2	3.0	3.0	1.1	6.0	2.4	0.4	3.7	
	Fagopyrum (ソバ属)	3.4	1.3	3.9	2.4	1.0														
	Liliaceae (ユリ科)										0.4				1.1					
	Persicaria (タデ属)				0.5					0.4		2.7	5.6		6.4	2.0	2.4	2.5	0.9	1.7
	Rumex (ギンギン属)			1.3	1.0	1.4					1.2	0.4	7.1	1.2	1.1	8.6	4.8	2.9	8.3	
	other Polygonaceae (その他のタデ科)															1.3				1.7
	Chenopodiaceae (アカザ科)		1.3					0.3			0.4			1.8		1.3			3.7	1.7
	Caryophyllaceae (ナデシコ科)	0.6	3.6	1.3							1.2		3.6	7.7		1.3	0.6	1.3	0.9	
	Ranunculaceae (キンポウゲ科)	1.7			1.5	1.0	0.4		0.8	2.0	10.7	12.2	7.1		5.3	3.0	8.4	5.6	1.7	
	Cruciferae (アブラナ科)	4.5	2.7		0.5							4.0	2.5	4.7	1.1	7.3		0.4		6.8
	Haloragaceae (アリノトウグサ科)						0.4													
	Umbelliferae (セリ科)	0.6	1.3			1.0		0.3	0.4	0.8	2.8	20.5		1.8	1.1	1.3	1.8	2.5	8.3	
Plantago (オオバコ属)																2.4	1.3			
Geranium (フウロソウ属)																0.6				
Actinostemma (ゴキヅル属)											1.8							0.9	1.7	
Artemisia (ヨモギ属)	2.8	1.3	6.6	8.7	17.2	4.8	5.1	3.5	6.8	7.3	41.1	25.4	17.8	28.7	14.6	28.6	14.2	29.6	10.2	
Cichorioideae (タンポポ亜科)	0.6	3.6				0.4						0.5				1.2				
Carduoideae (キク亜科)	0.6	2.2	2.6	0.5					0.4	0.4	3.6	0.5	5.3	7.4	3.3	7.7	2.1	13.9	16.9	
シダ お よ び コ ケ 胞 子	Selaginella (イワヒバ属)								2.1	2.0	1.8	2.0	4.7	5.3	2.6		0.4	5.6	1.7	
	Ceratopteris (ミズワラビ属)	22.2	16.1	1.3					0.8		7.6	5.5	6.5							
	Pteris (イノモトソウ属)	8.5	9.8	43.4	4.4	2.4	1.6	1.6	12.1	23.6	9.7	39.3	13.2	34.3		7.9	5.4	9.6	49.1	23.7
	Pyrrosia (ヒトツバ属)			2.6					1.6	1.7	2.8	5.4	6.6	9.5	43.6	4.6	4.2	4.2	15.7	10.2
	Lycopodium (ヒカゲノカズラ属)			1.3		0.5						0.4								
	Gleicheniaceae (ウラボシ科)	434.1	234.8	1,669.7	191.7	132.5	9.1	1.3	1.6					0.6	3.2	0.7	7.7			
	other monolete Fern Spore (その他の単溝型シダ孢子)	100.6	41.5	163.2	59.2	42.3	14.7	9.4	19.1	27.0	29.8	117.4	78.7	85.8	201.1	44.4	60.7	32.2	140.7	147.5
other trilete Fern Spore (その他の三溝型シダ孢子)	91.5	16.5	32.9	16.5	29.7	9.9	2.9	5.9	13.5	11.3	37.9	22.3	26.6	48.9	11.9	24.4	7.5	36.1	32.2	
Riccia (ウキゴケ属)	9.1	4.5	3.9							0.4	0.4	1.0								

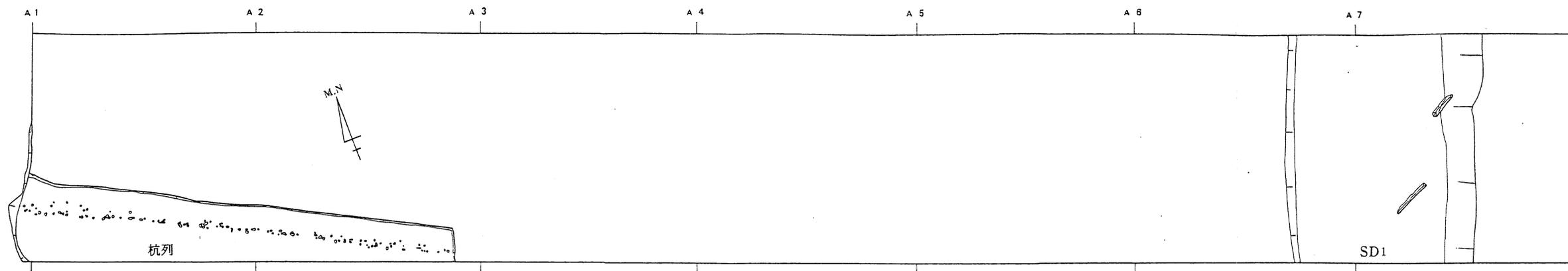


Fig 8 Aトレンチ平面図1

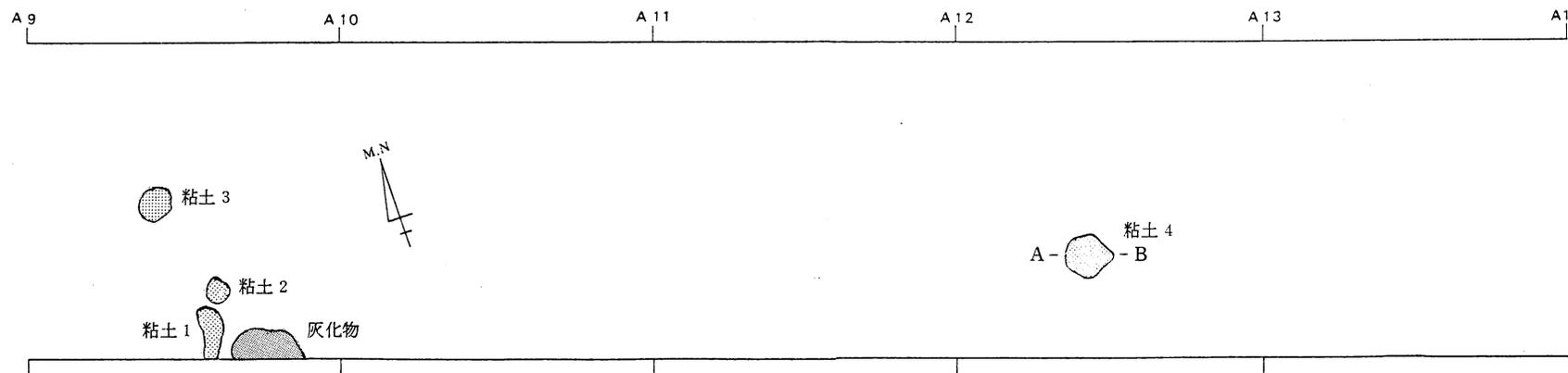
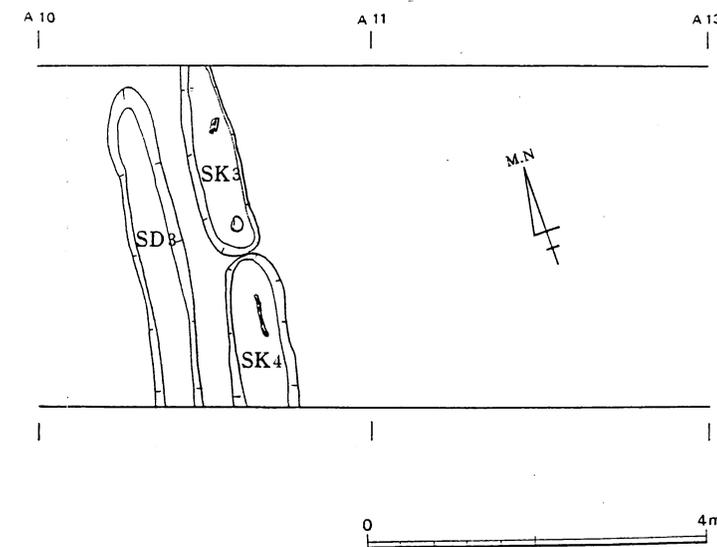


Fig 9 Aトレンチ平面図2



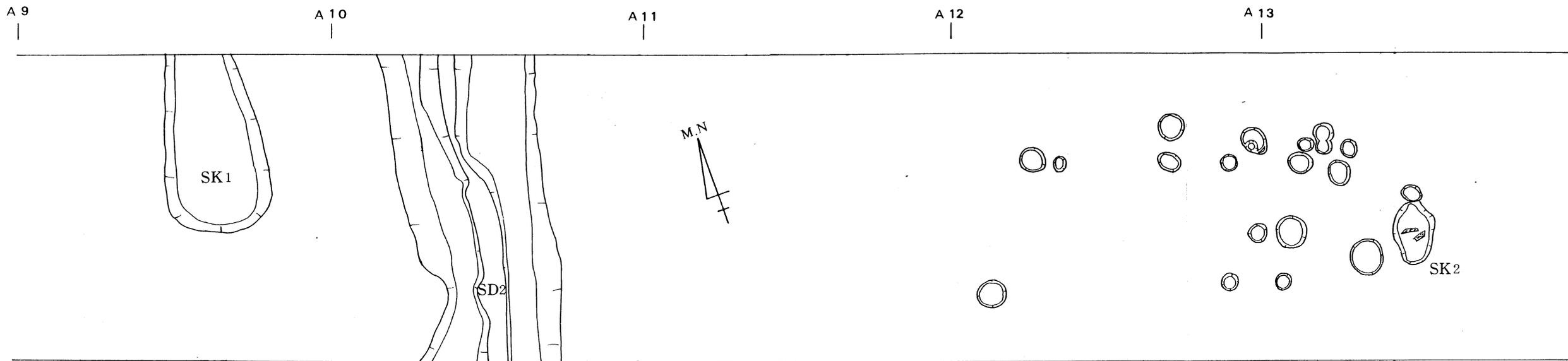


Fig 10 Aトレンチ中層(Ⅶ、Ⅷ層)検出遺構平面図

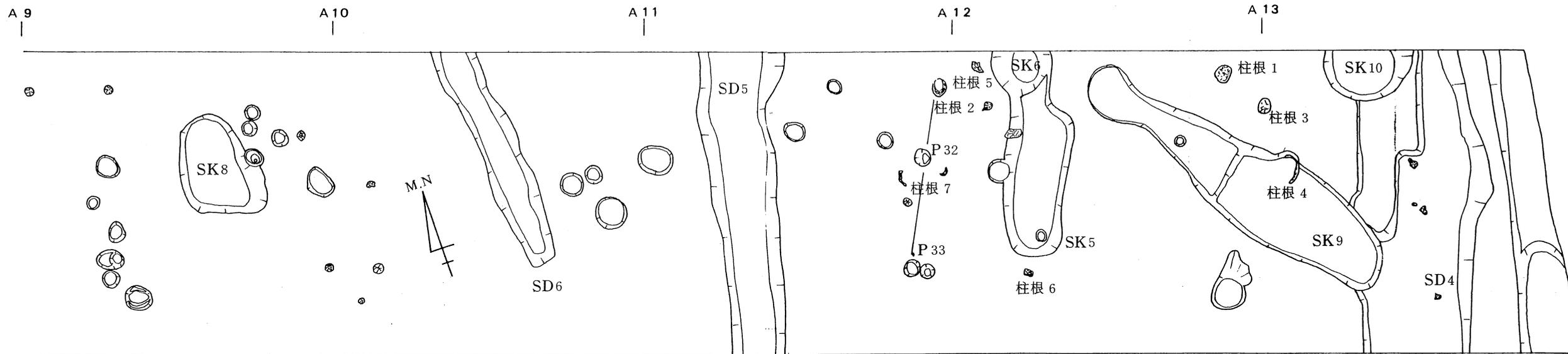


Fig 11 Aトレンチ下層(Ⅸ層)検出遺構平面図



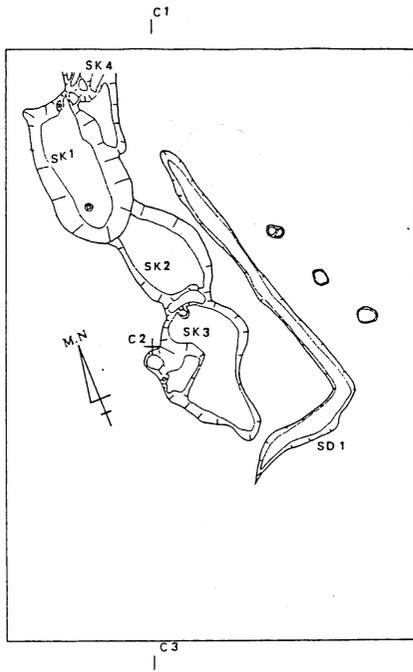


Fig 12 Cトレンチ 2・3区検出遺構平面図

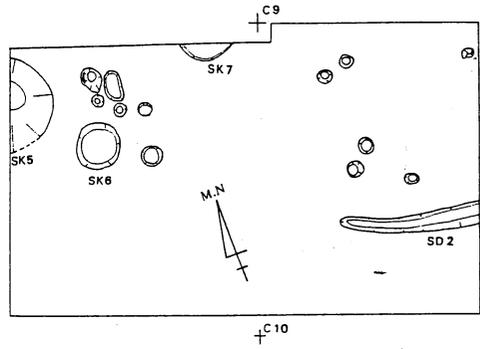


Fig 13 Cトレンチ 9区Ⅴ・Ⅵ層検出遺構平面図

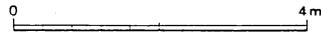


Fig 14 Cトレンチ 8・9区Ⅹ層砥石群平面図

Cトレンチ 遺構全体図

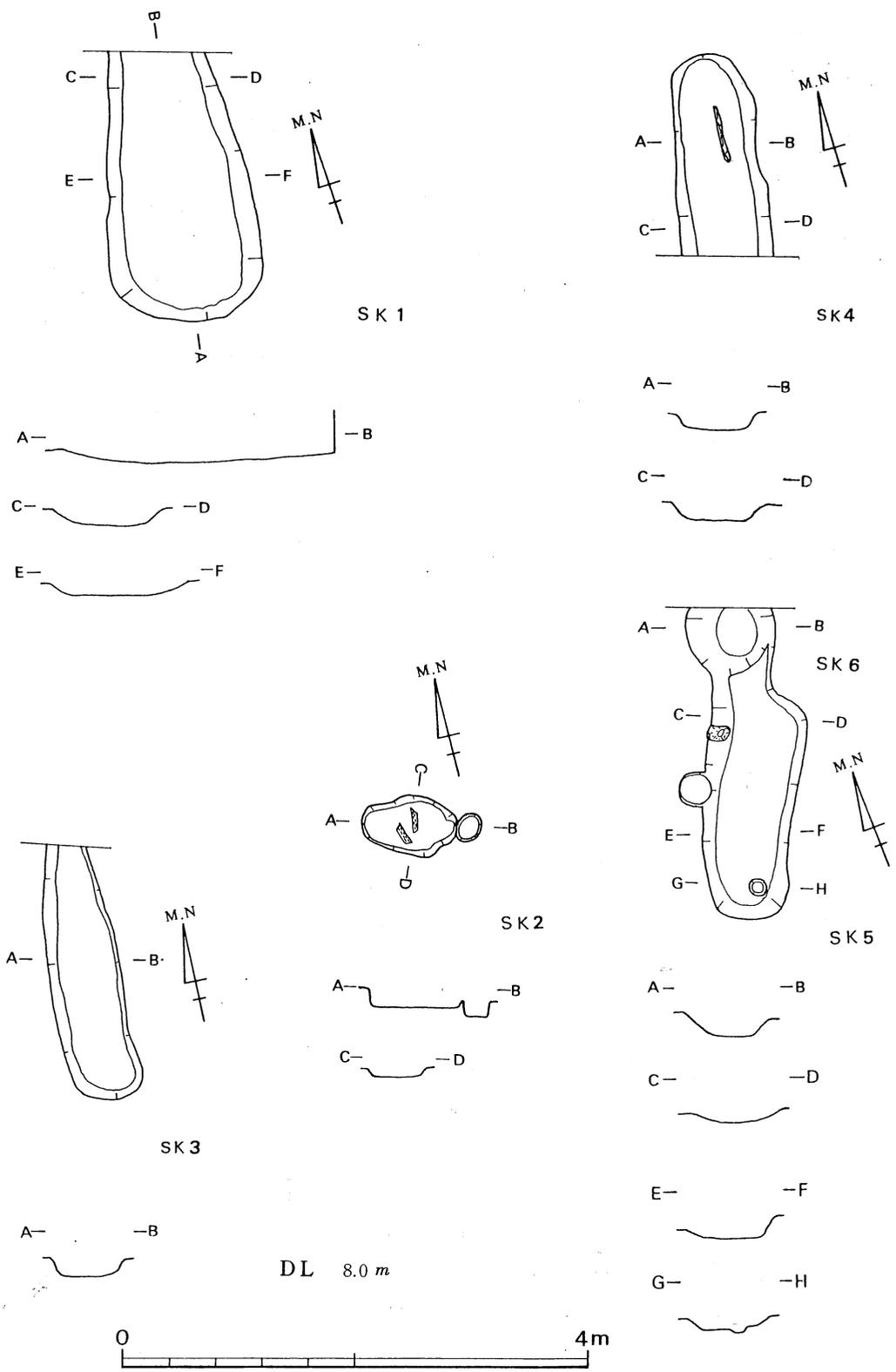


Fig 15 Aトレンチ遺構図

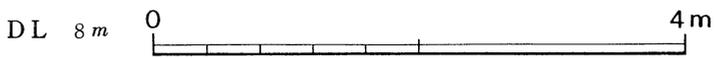
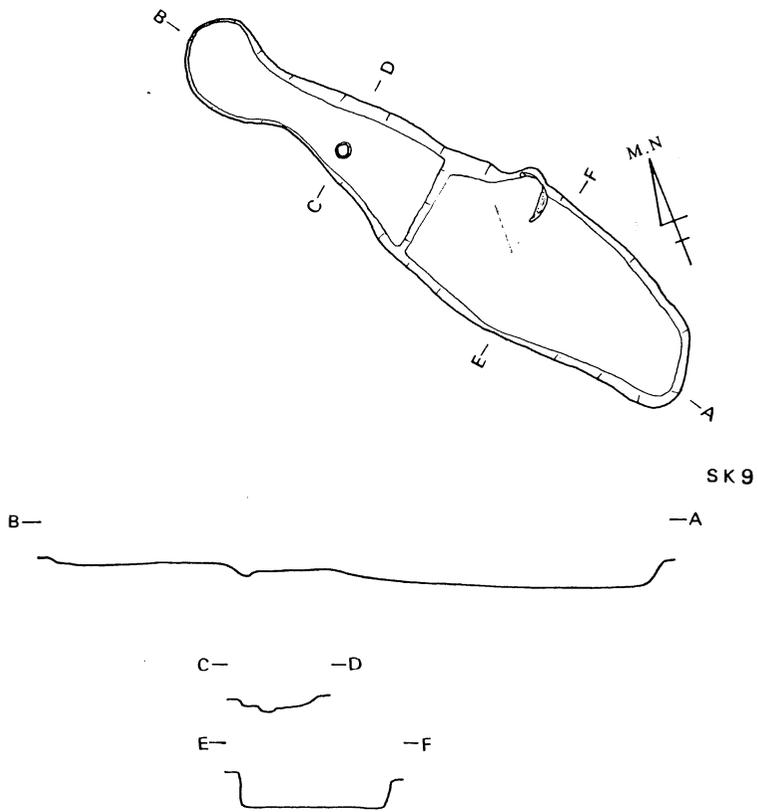
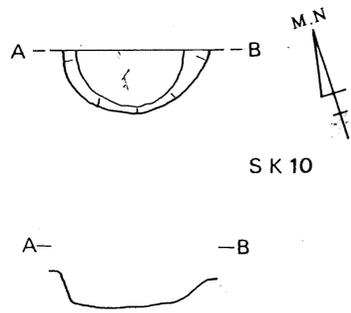
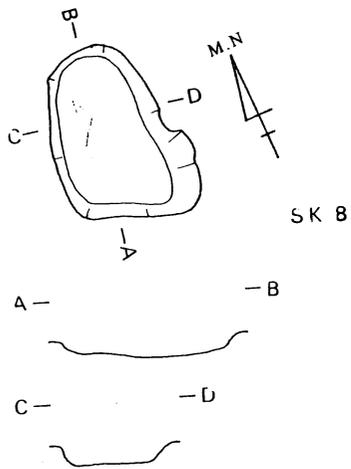


Fig 16 Aトレンチ遺構図

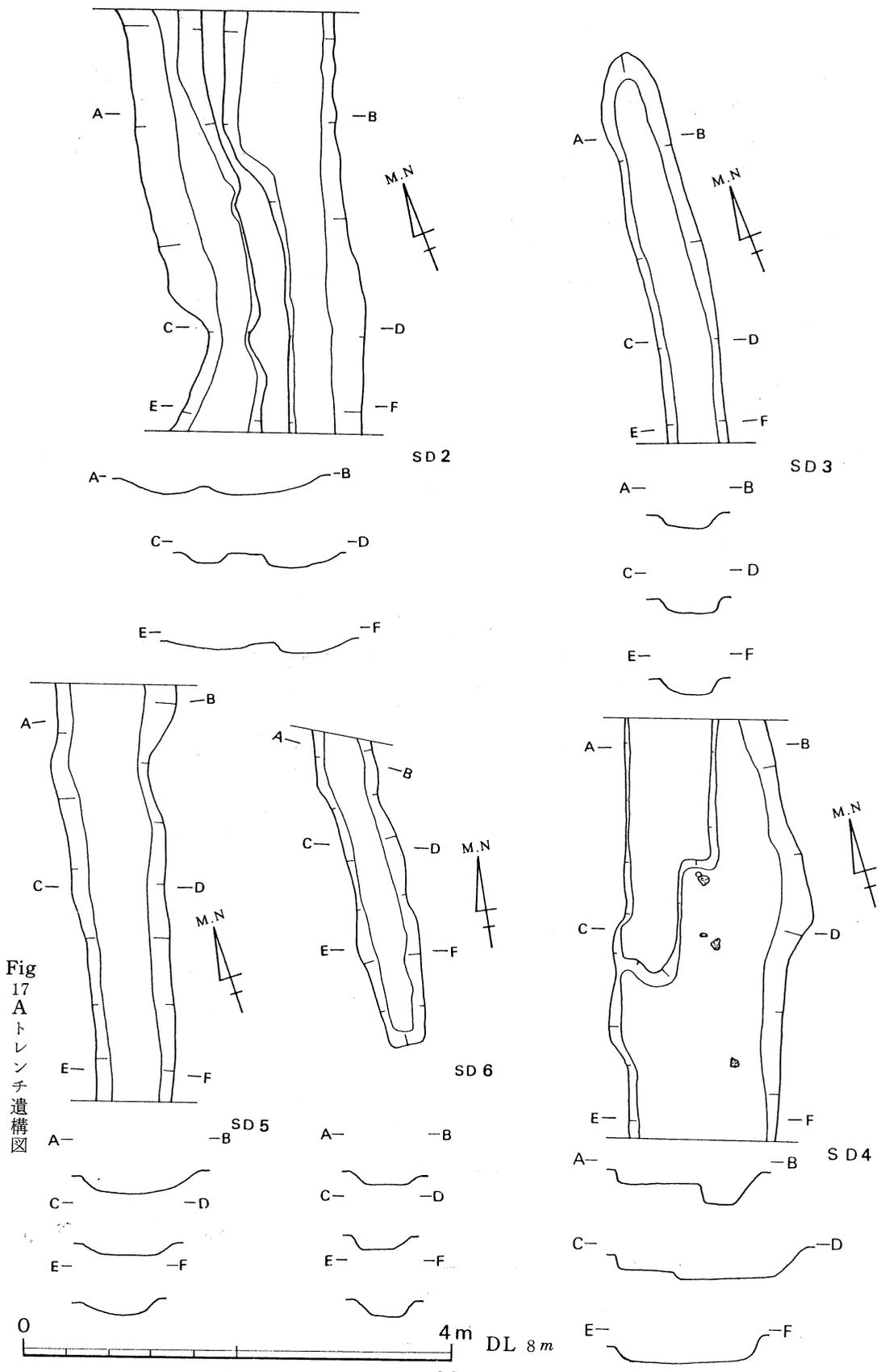
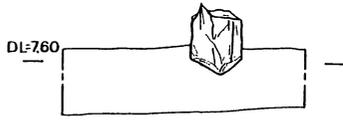
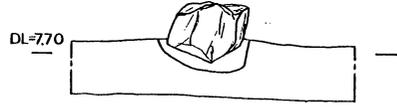


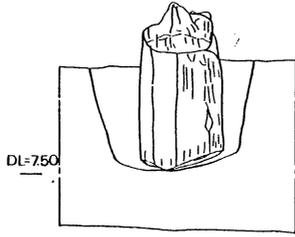
Fig 17 A トレンチ遺構図



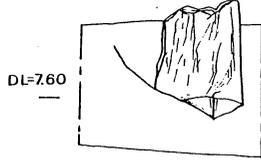
柱根 9



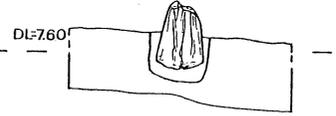
柱根 2



柱根 1

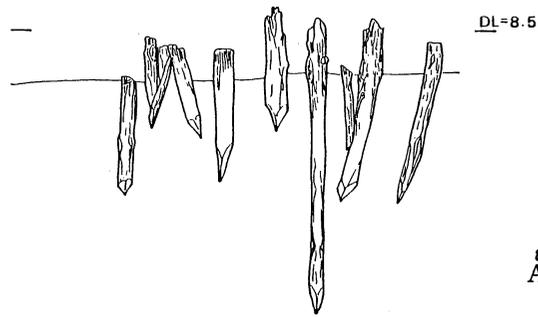


柱根 7

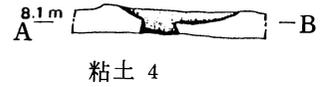


柱根 8

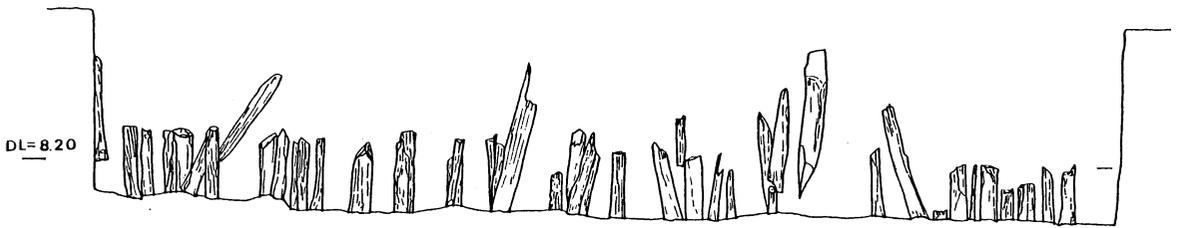
Aトレンチ柱根



Aトレンチ杭列



粘土 4



Bトレンチ杭列



Fig 18 杭列・柱根見通断面図

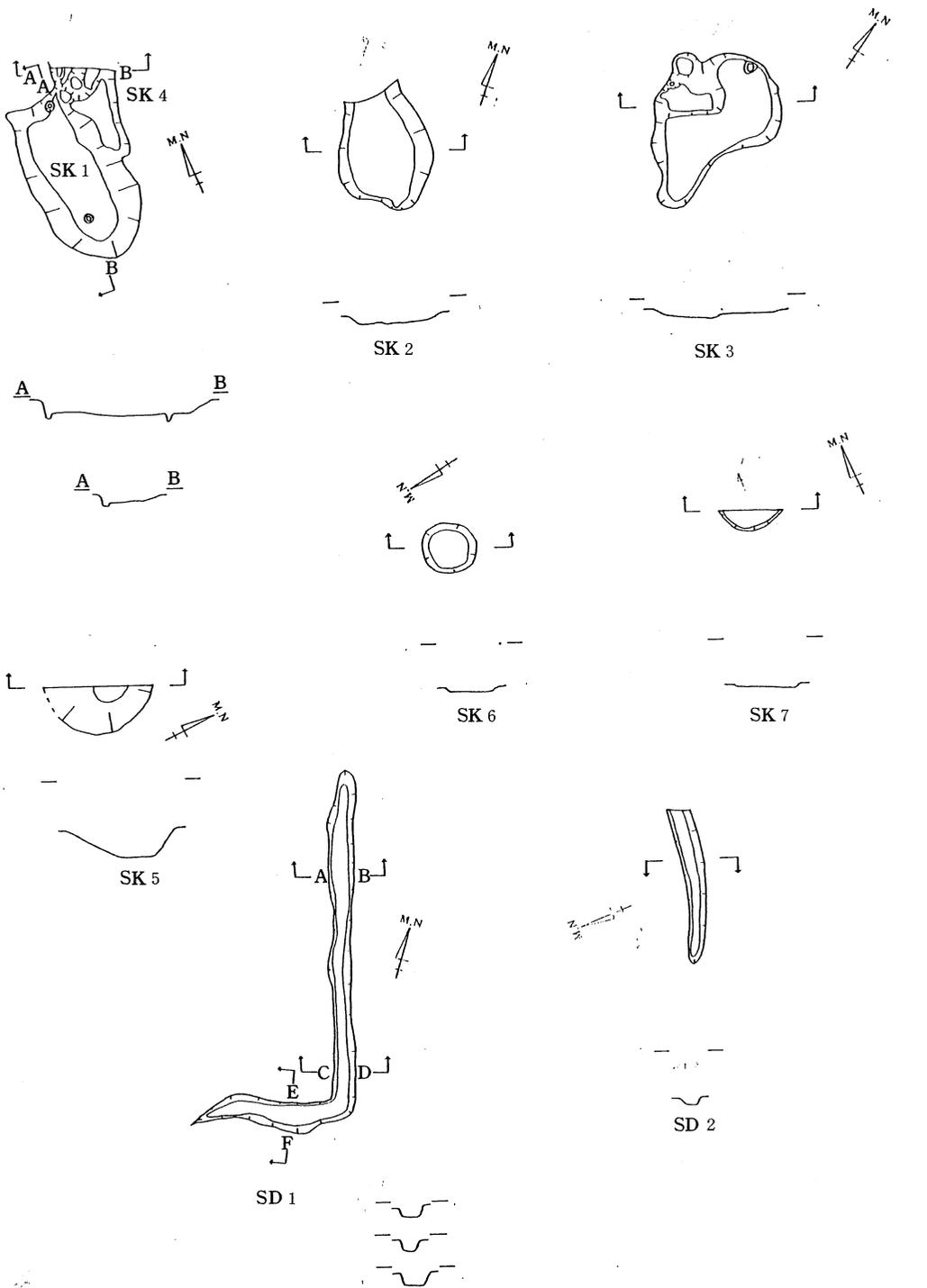


Fig 19 C トレンチ遺構図

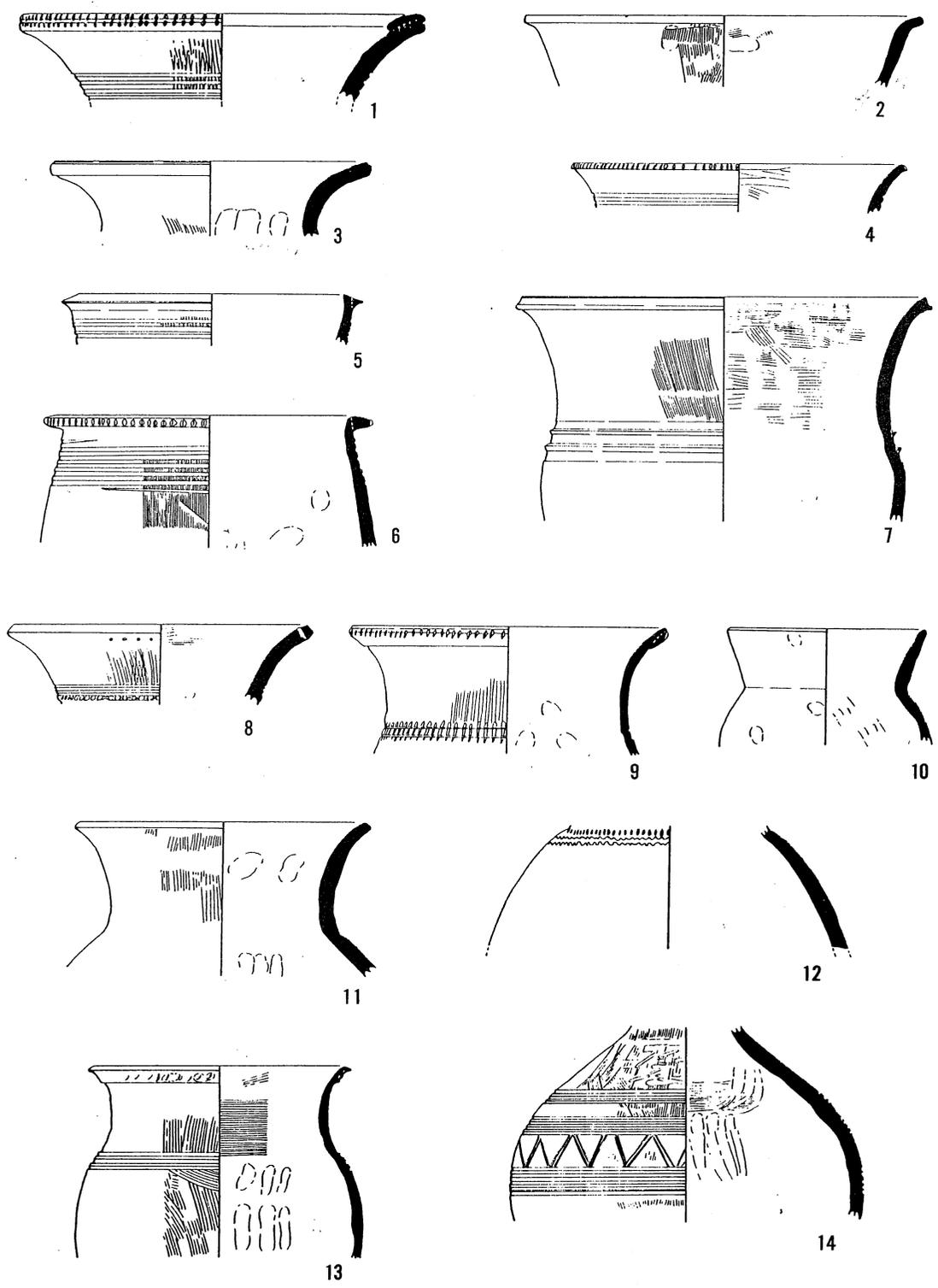


Fig 20 Aトレンチ出土土器実測図 (SK3, 9, SD1, 2, 3)

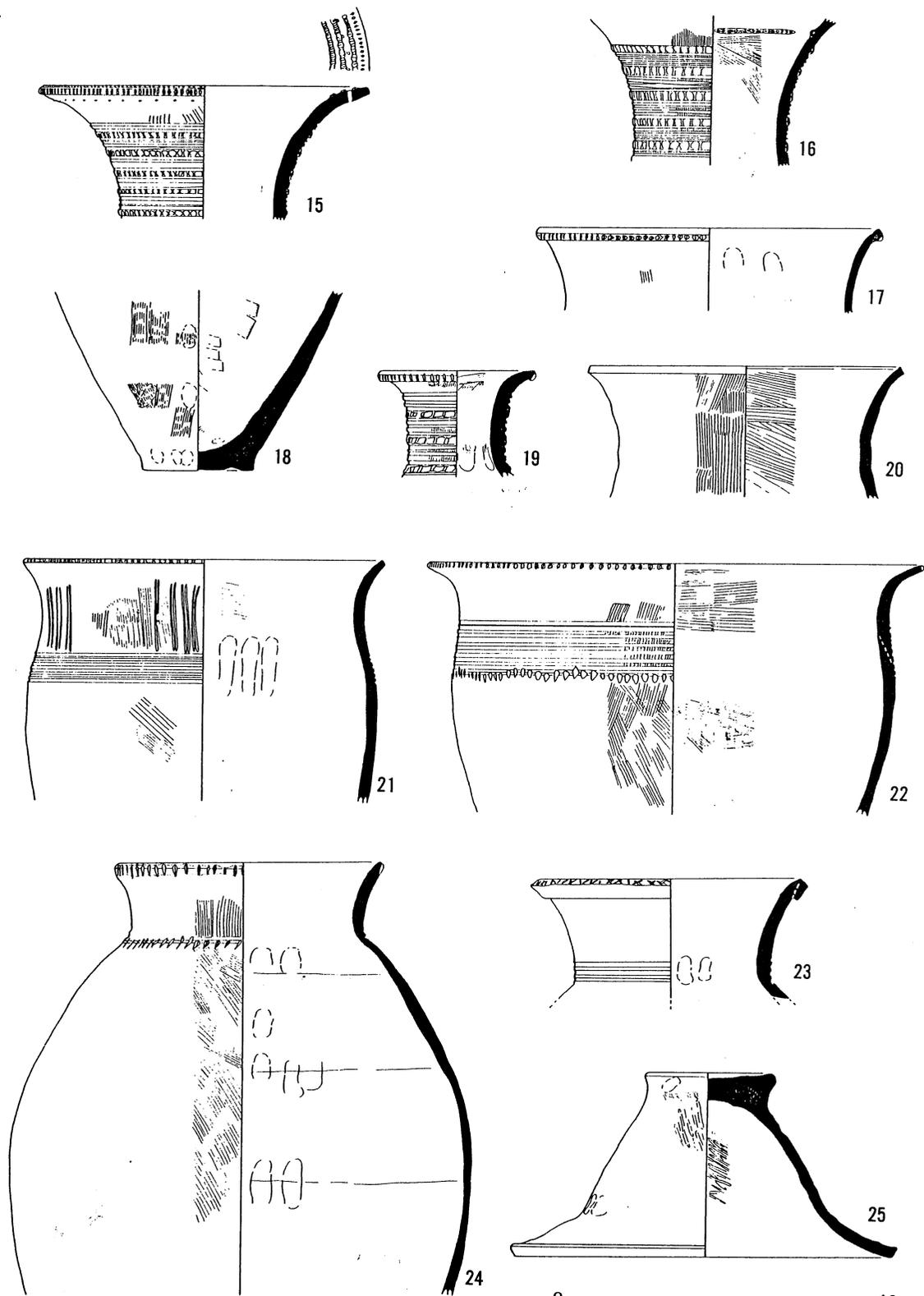


Fig 21 Aトレンチ出土土器実測図(SD 3. 4. 5. 包含層第Ⅶ層)

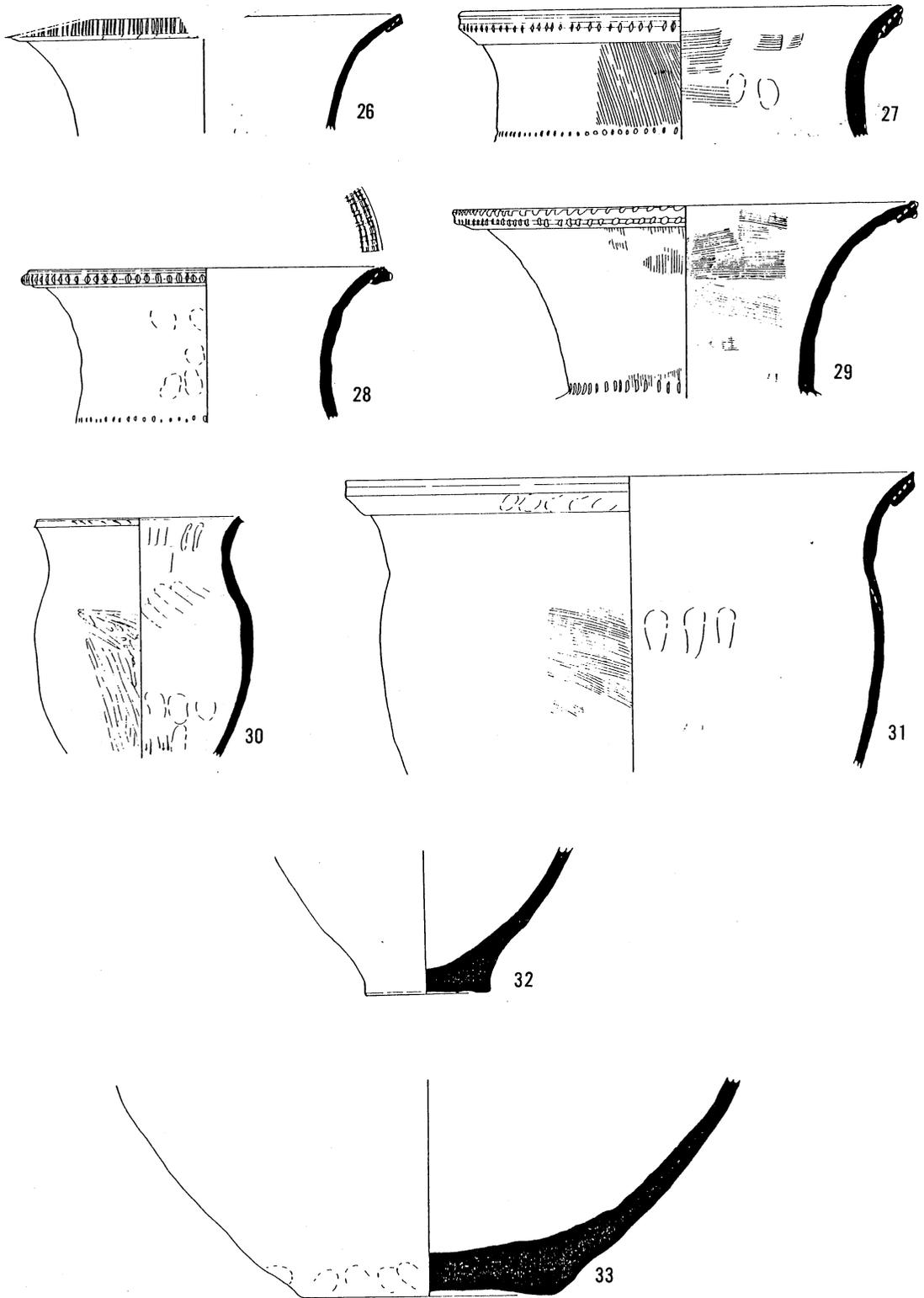


Fig 22 AトレンチⅦ・Ⅷ層出土土器実測図

0 40cm

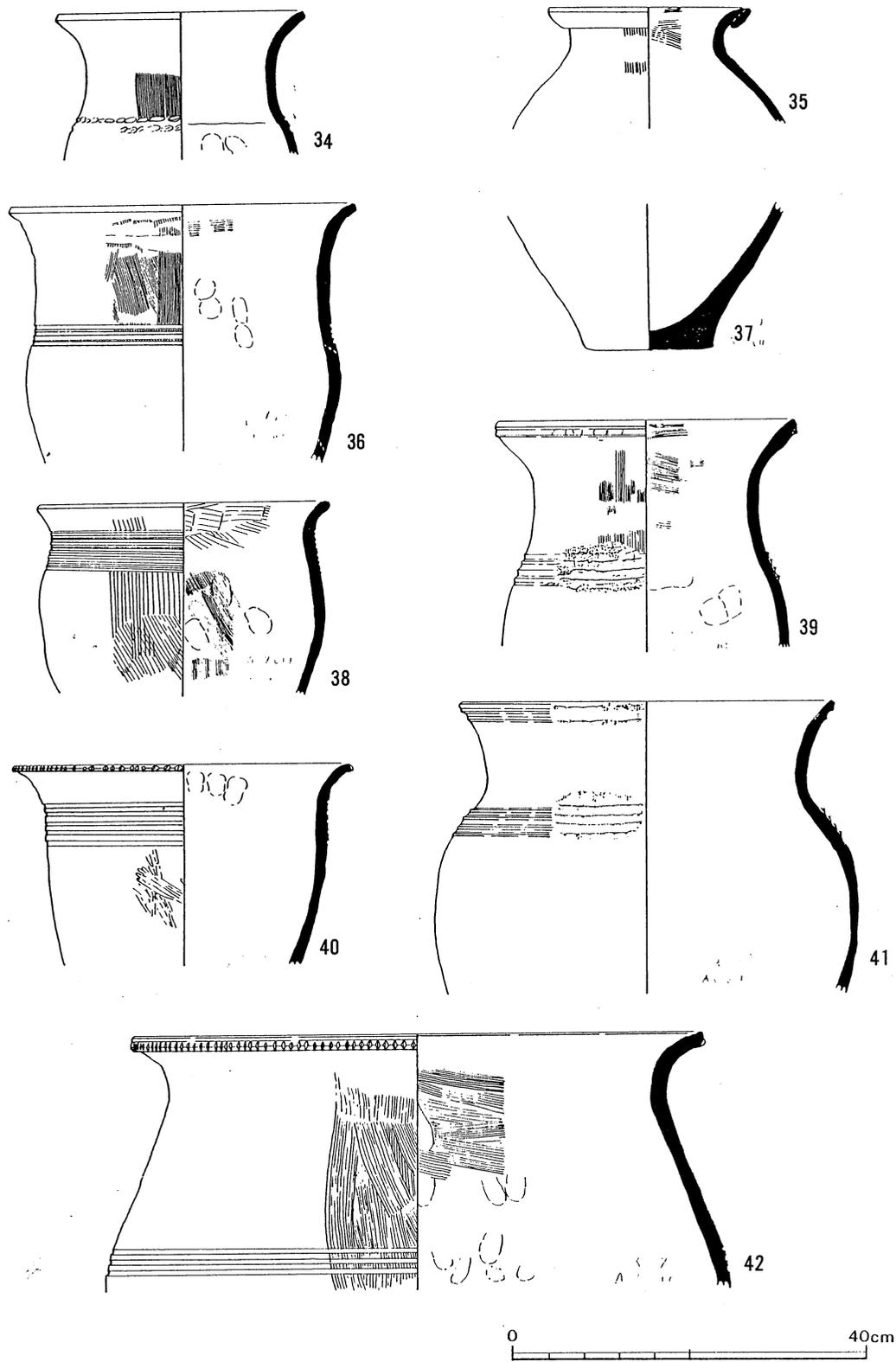
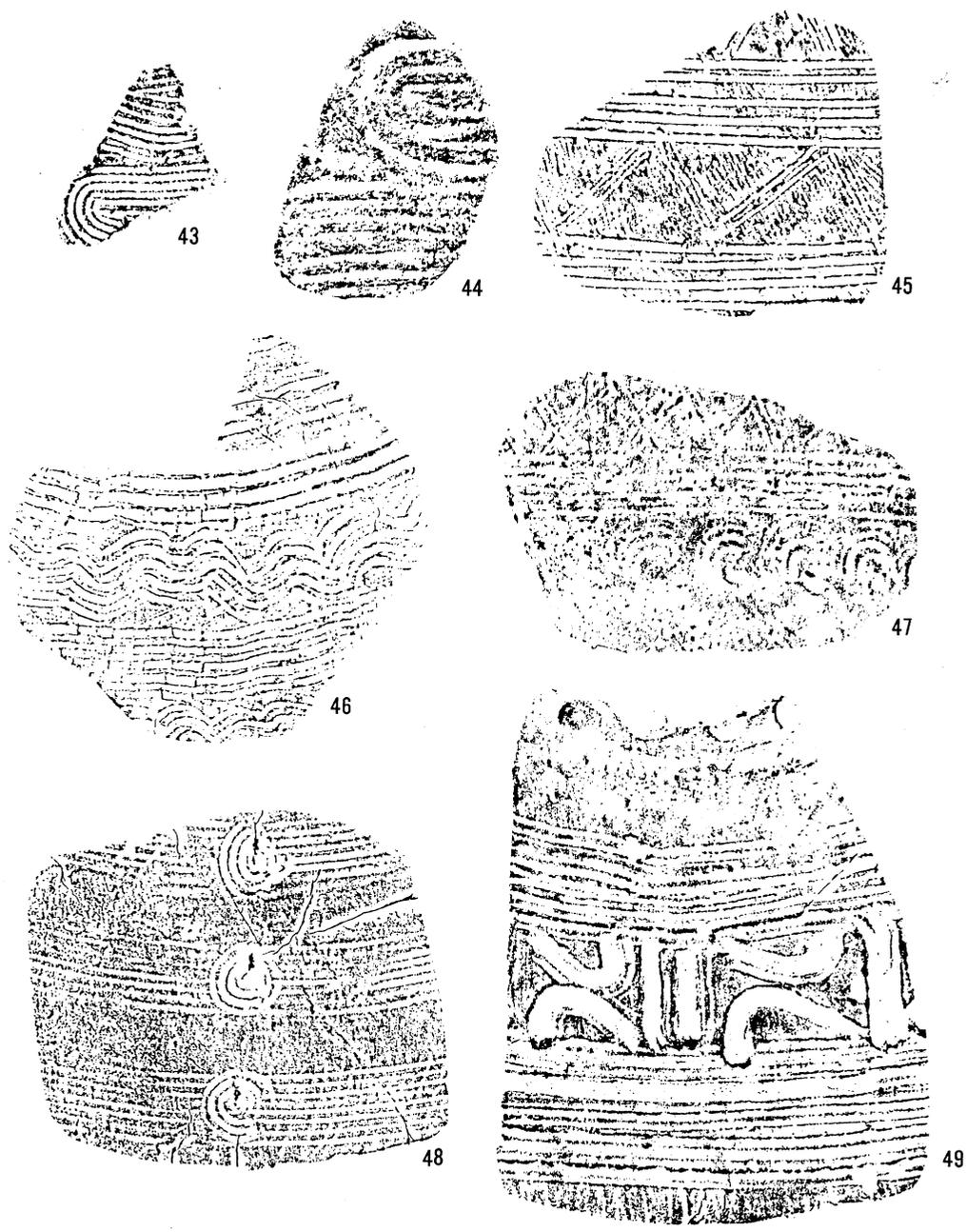
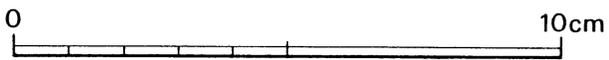


Fig 23 AトレンチⅦ・Ⅷ層 BトレンチSD1 出土土器実測図



43 : CトレンチⅦ層 44 : AトレンチSK1 45 : AトレンチSK3
 46 : BトレンチⅦ層 47 : BトレンチⅤ層 48 : AトレンチSK3
 49 : CトレンチⅧ層

Fig 24 土器文様各種拓本



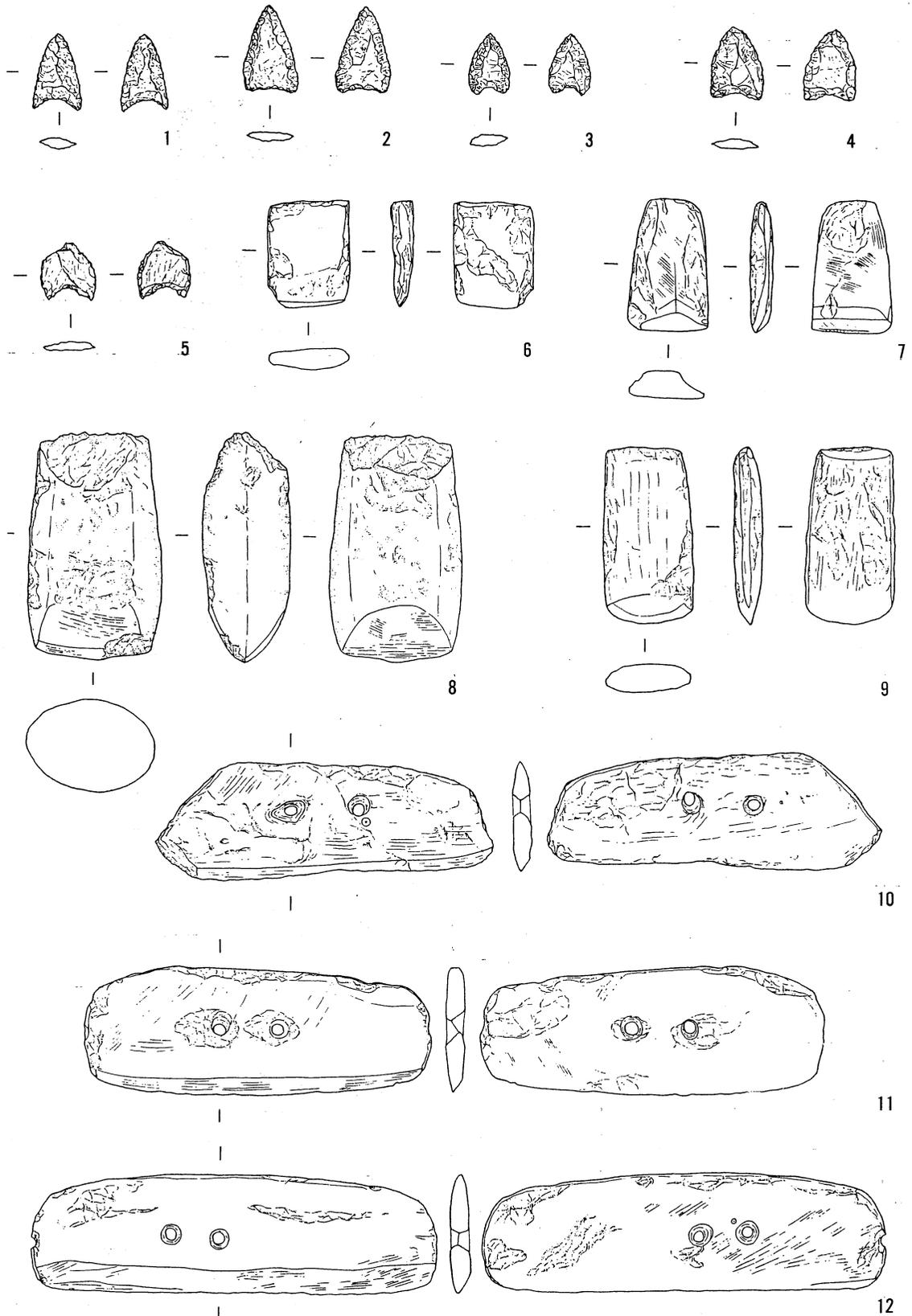


Fig 25 石器实测图

0 10cm

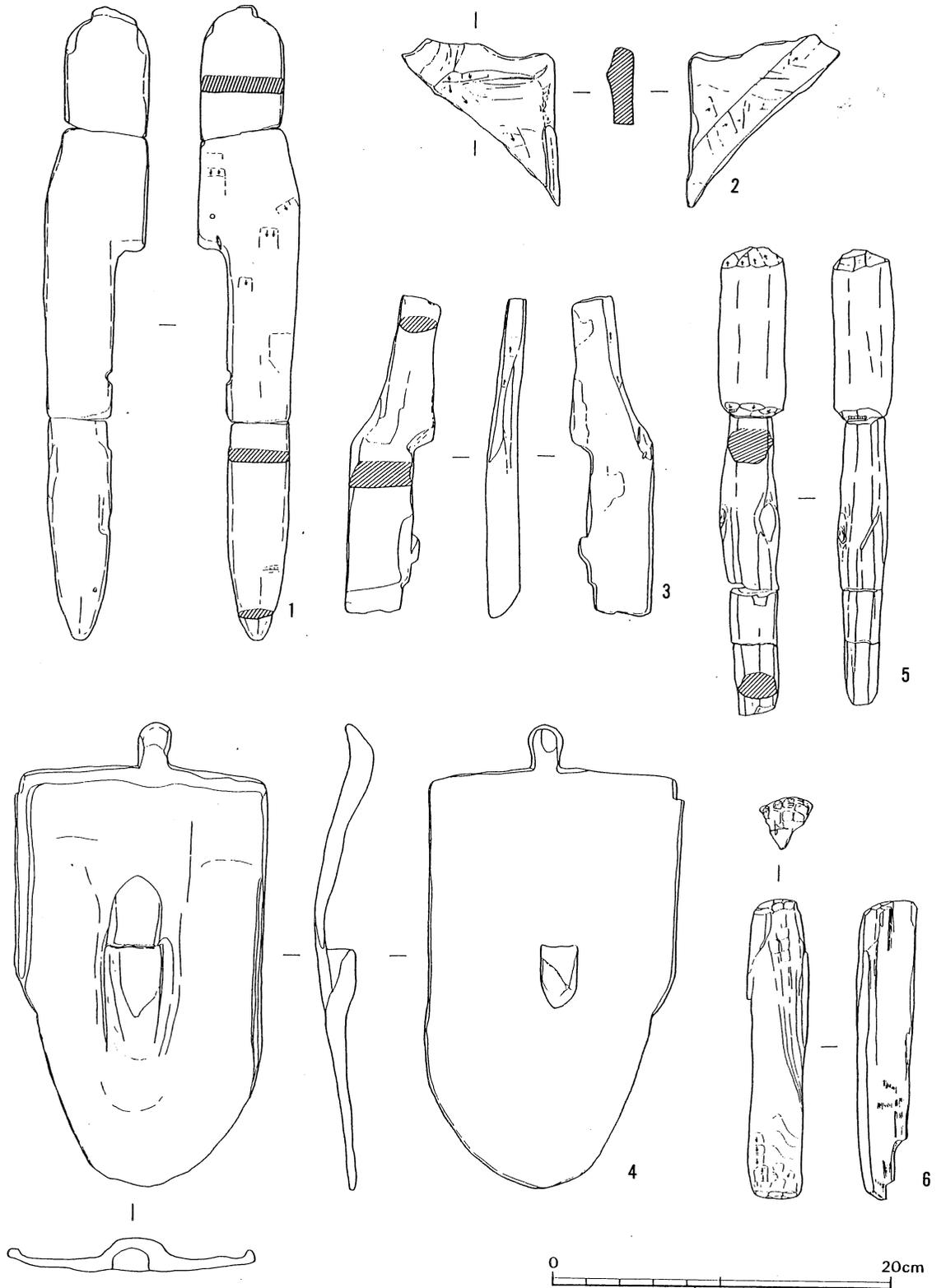


Fig 26 木器実測図

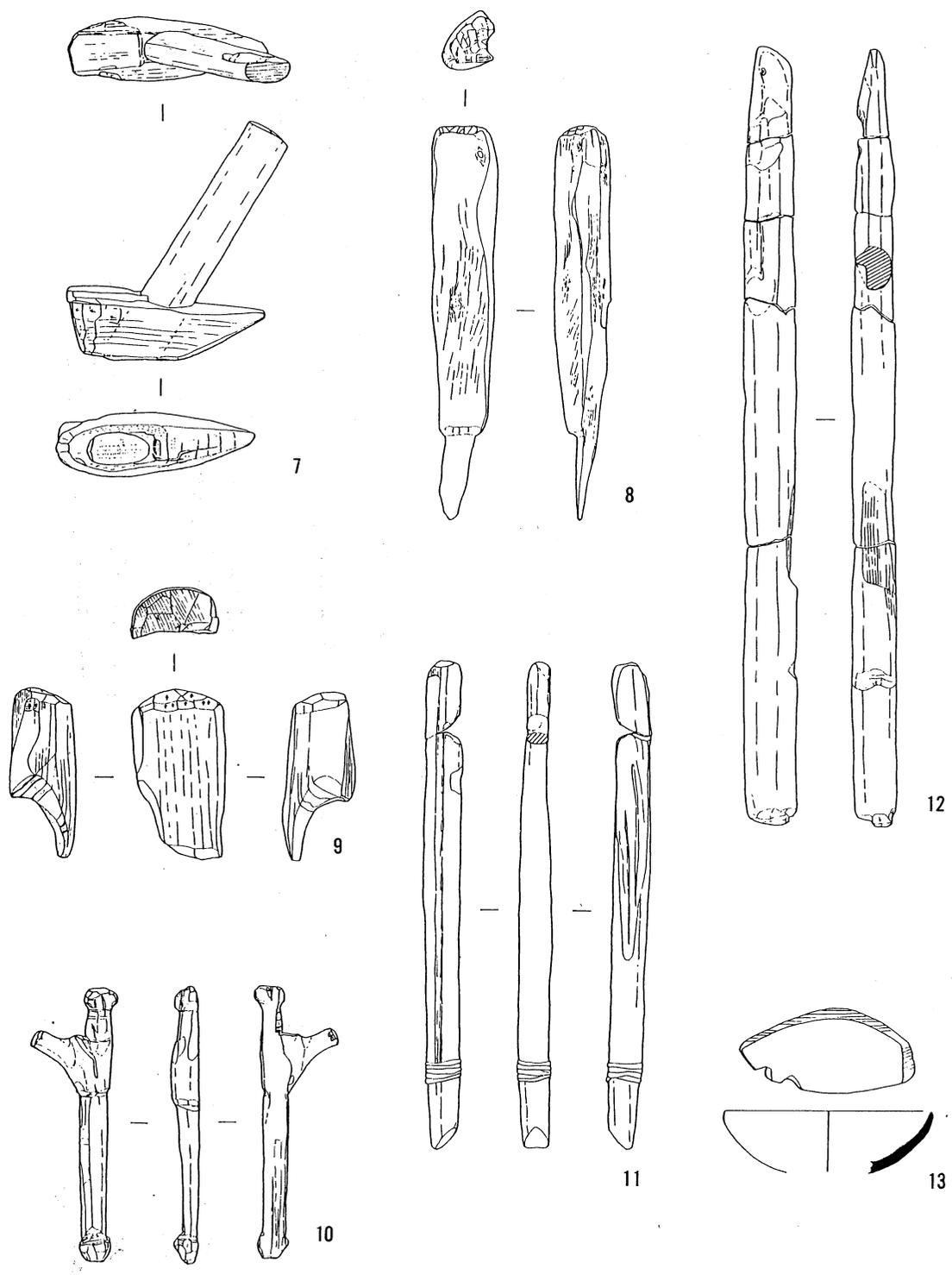
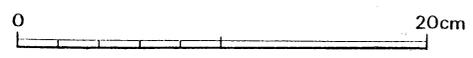
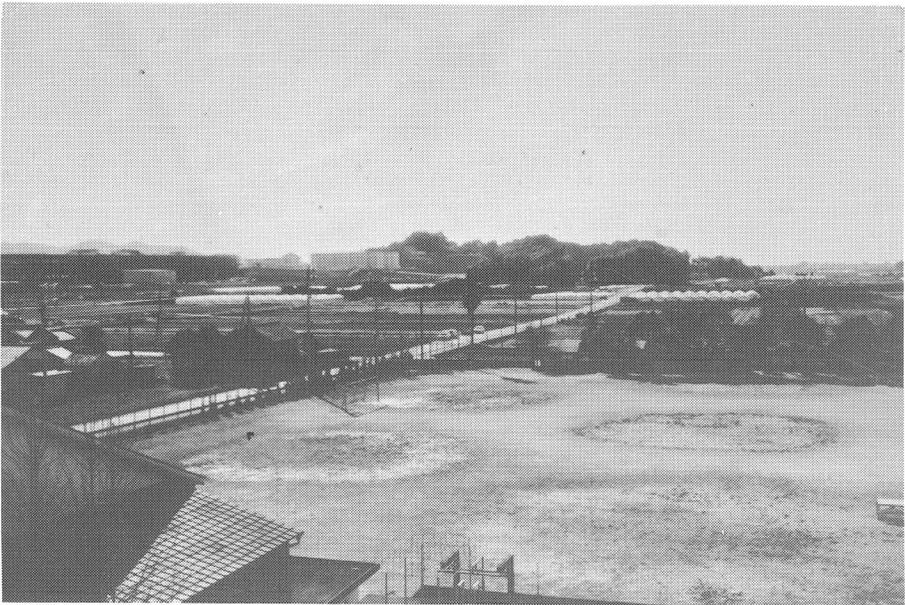


Fig 27 木器実測図





1

調査前全景（北西より）



2

調査前全景（北より）

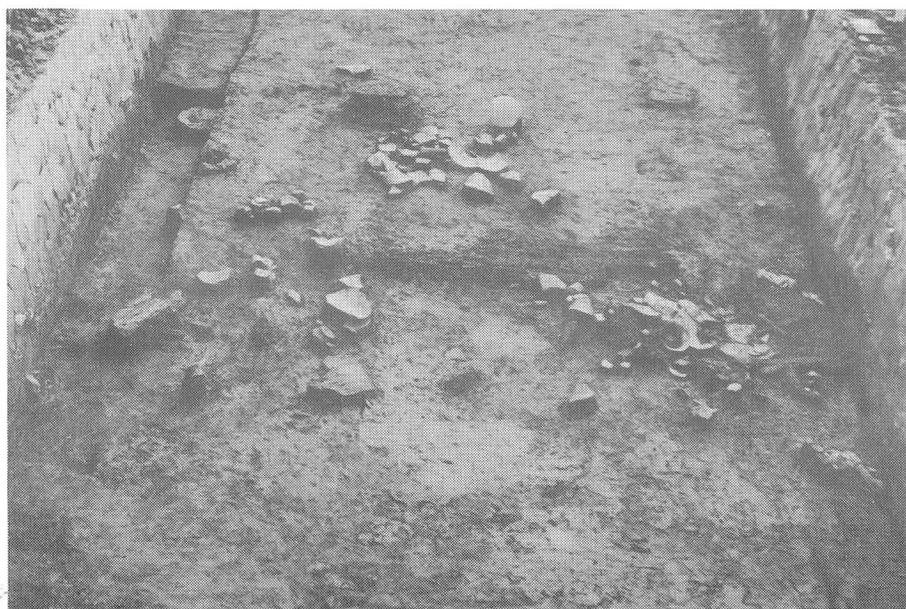
PL 2

A
ト
レ
ン
チ



3

Aトレンチ VII・VIII層(西より)



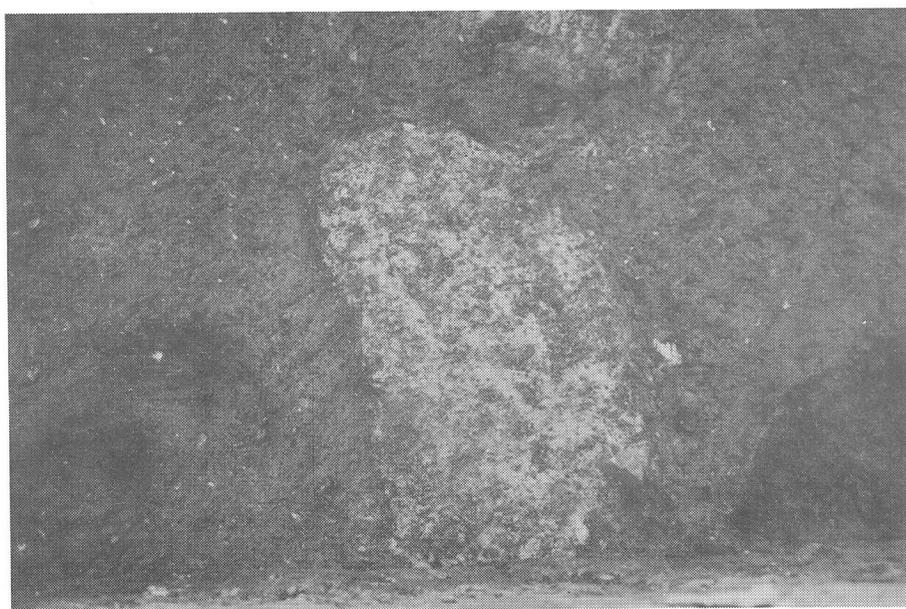
4

A-10・11区 VII層 遺物出土状況



5

A-11区 VII層 遺物出土状況



6

A-9区 土器製作用粘土出土状況

PL 4

A
ト
レ
ン
チ



7

A-12区 土器製作用粘土堆積状況



8

SD 3 (左) 遺物出土状況、 SK 4 検出状況



9

S D 3 遺物出土状況



10

同 上

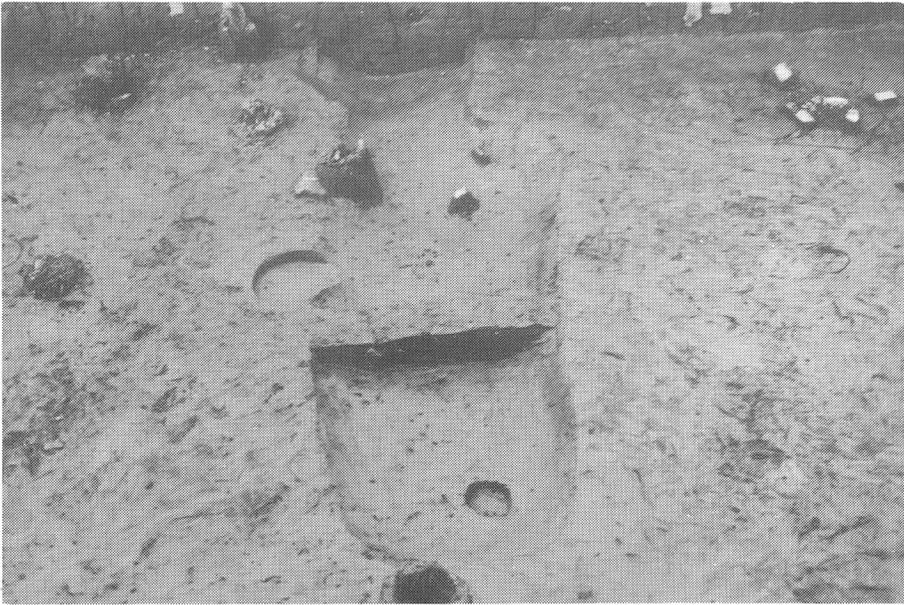
PL 6

A
ト
レ
ン
チ



11

SD 6 床面遺物出土状況



12

SK 5・SK 6 完掘状況



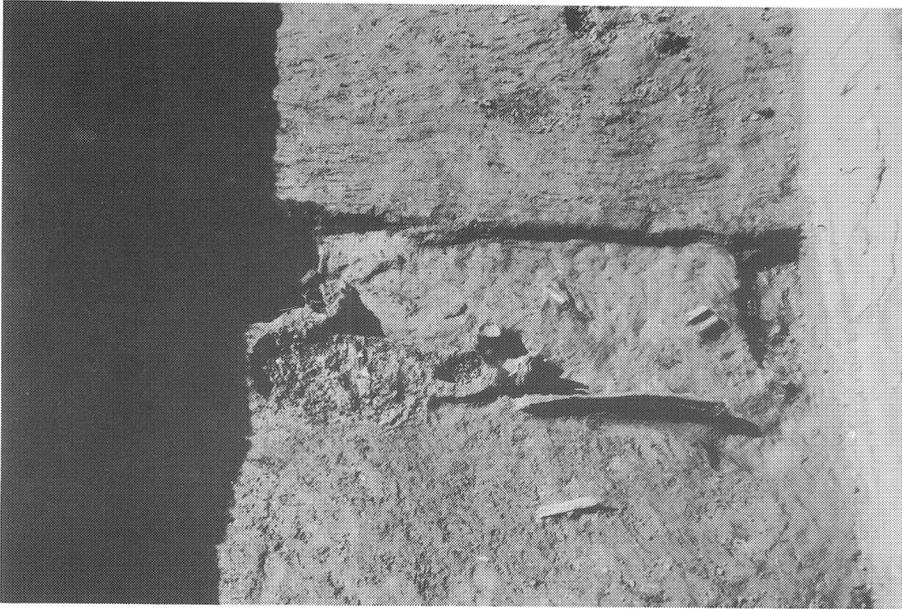
13

SD 2 完掘状況



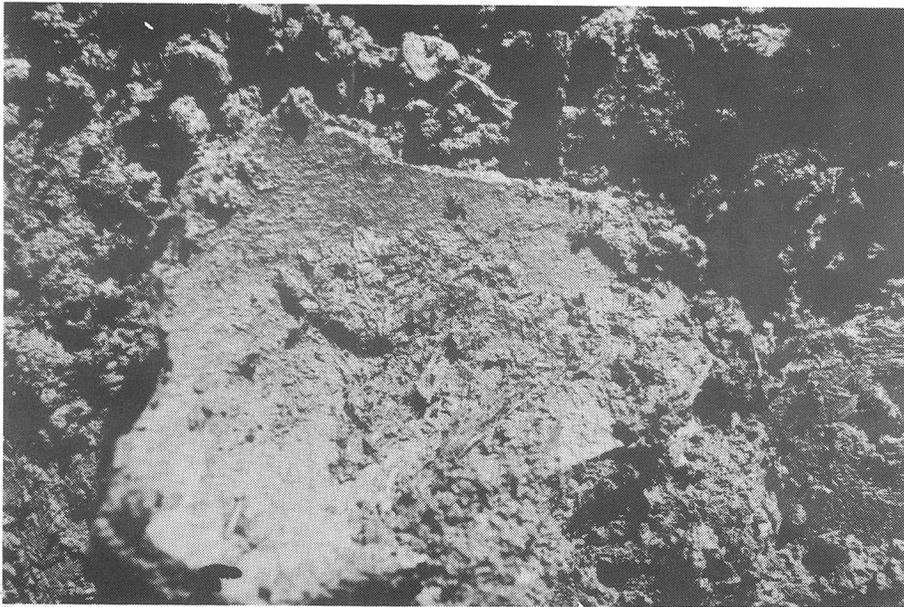
14

SD 4・SK 10 完掘状況



15

SK 4 ・ SD 4 遺物出土状況



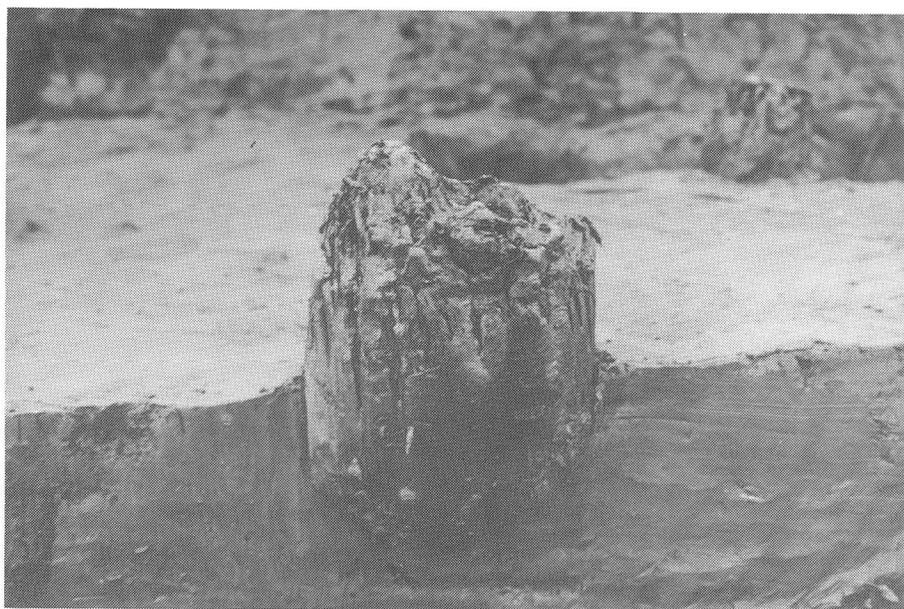
16

SK 4 出土土器内面の粗



17

A 区 柱 根



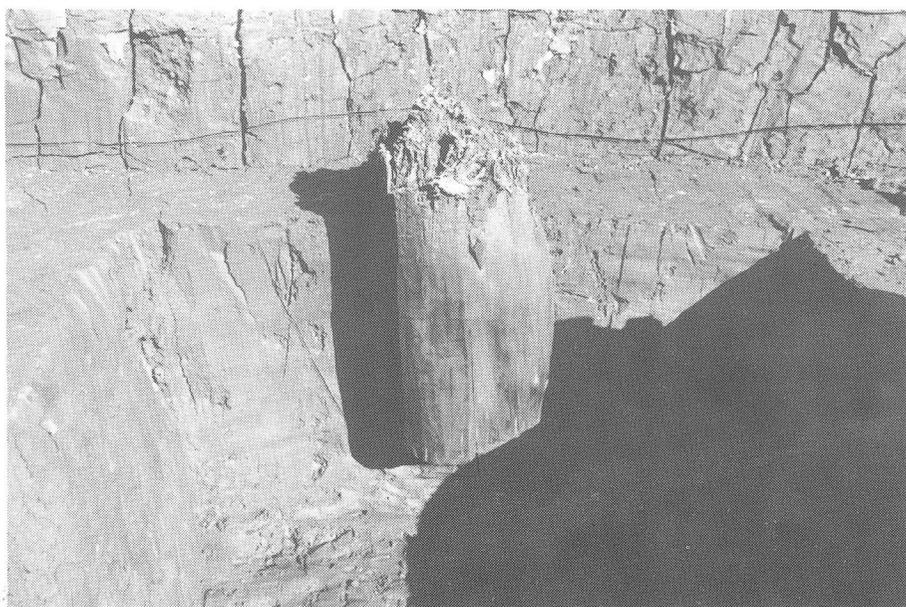
18

同 上



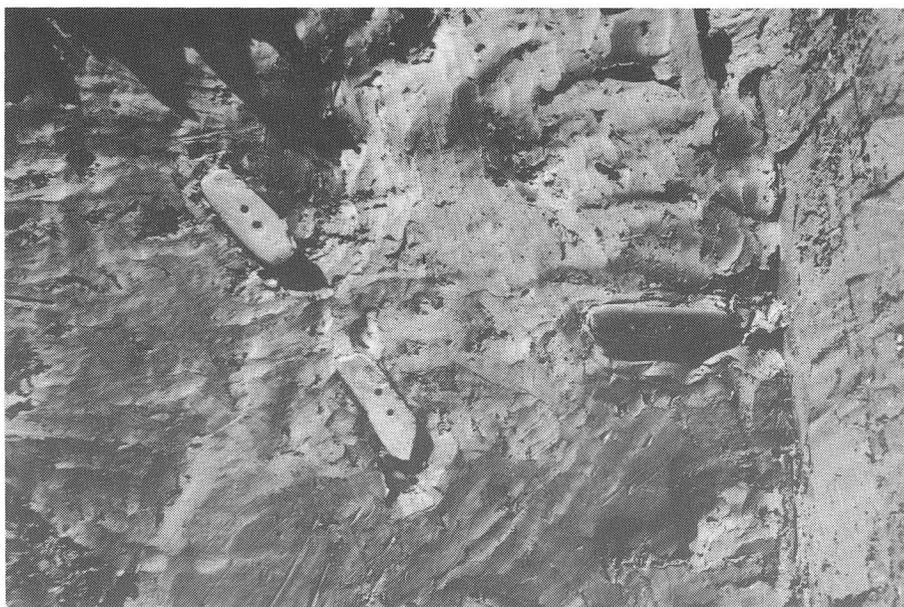
19

A 区 柱 根



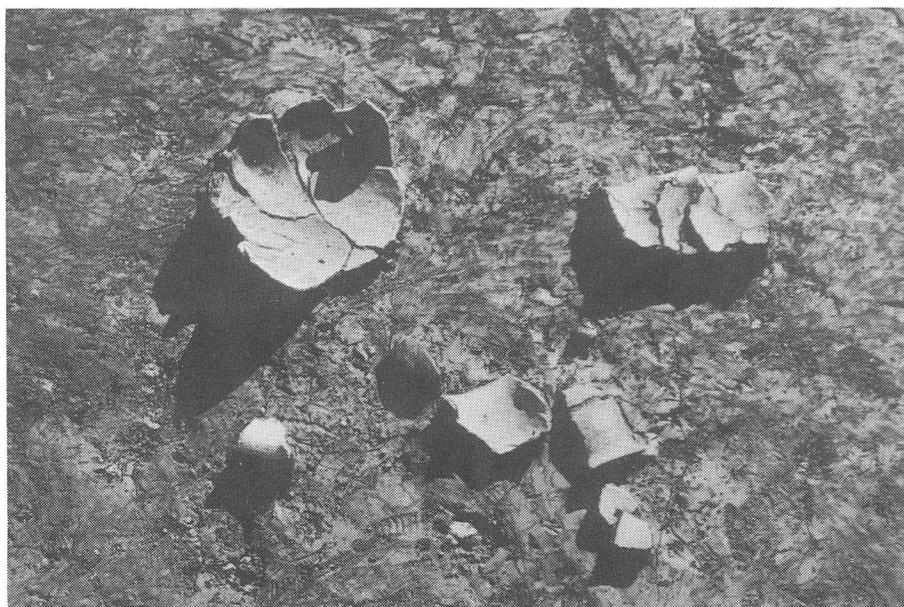
20

同 上



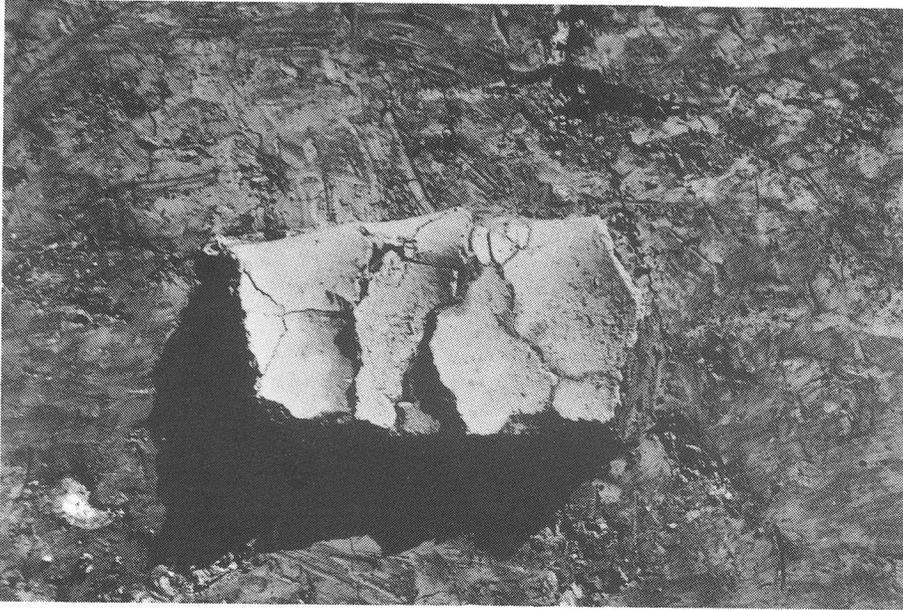
21

A-8区 IX層 石包丁出土状況



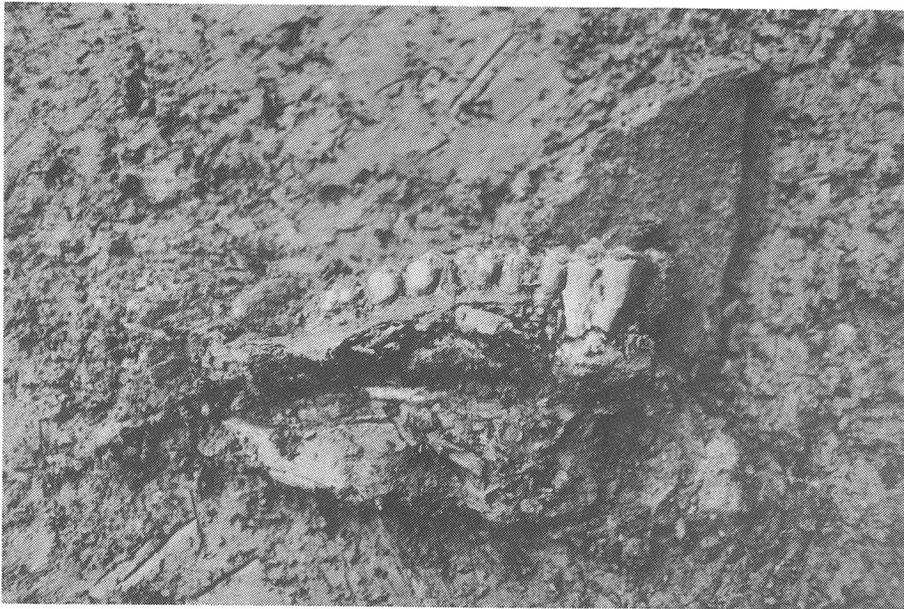
22

A-8区 IX層 弥生前期土器出土状況



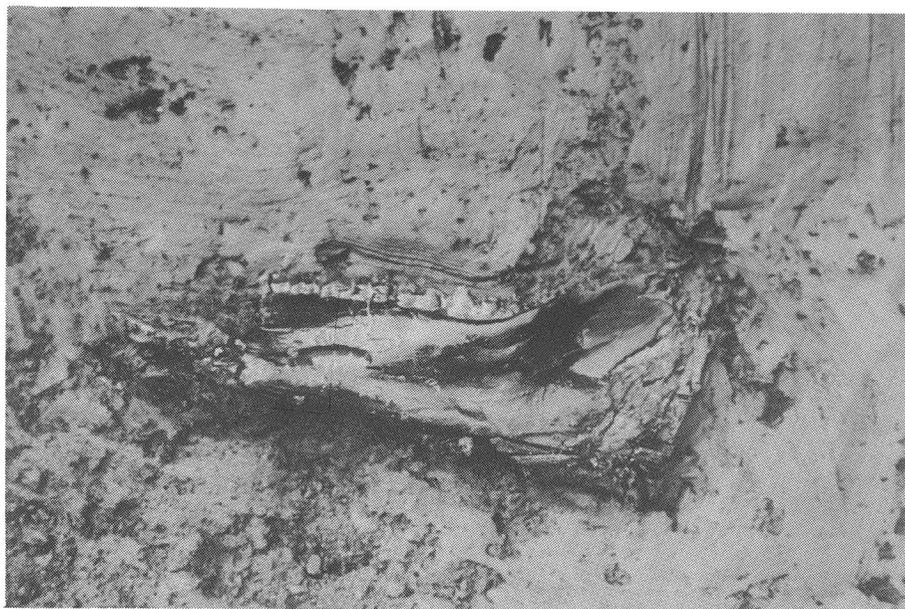
23

A-8区 IX層 甕形土器出土状況



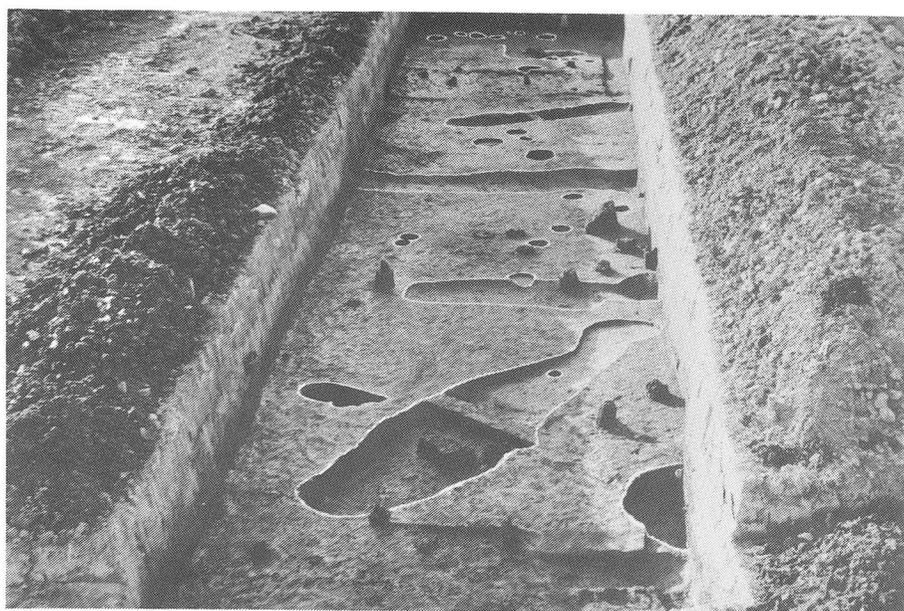
24

B-9区 VIII層 猪顎骨と歯



25

A-9区 VIII層 猪顎骨

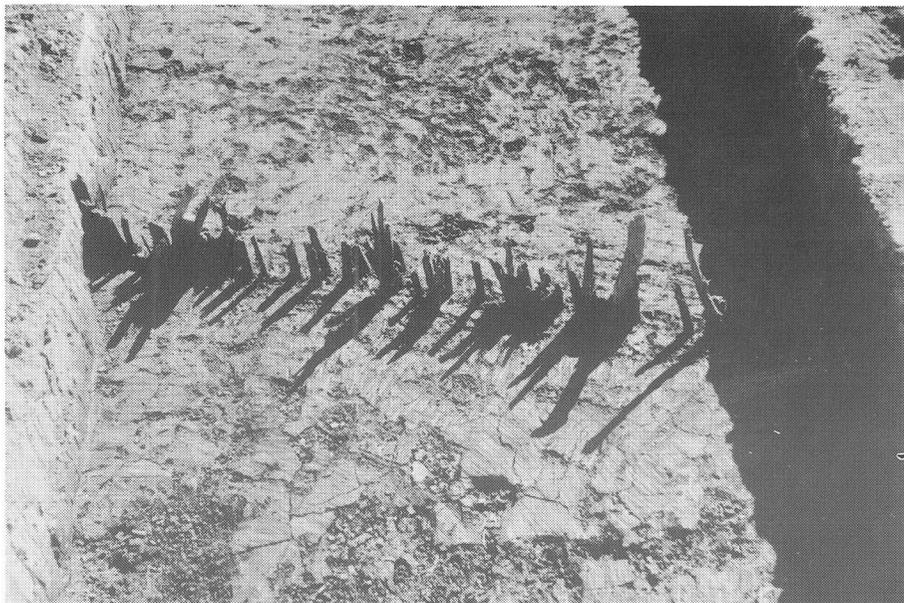


26

Aトレンチ 完掘状況(東から)

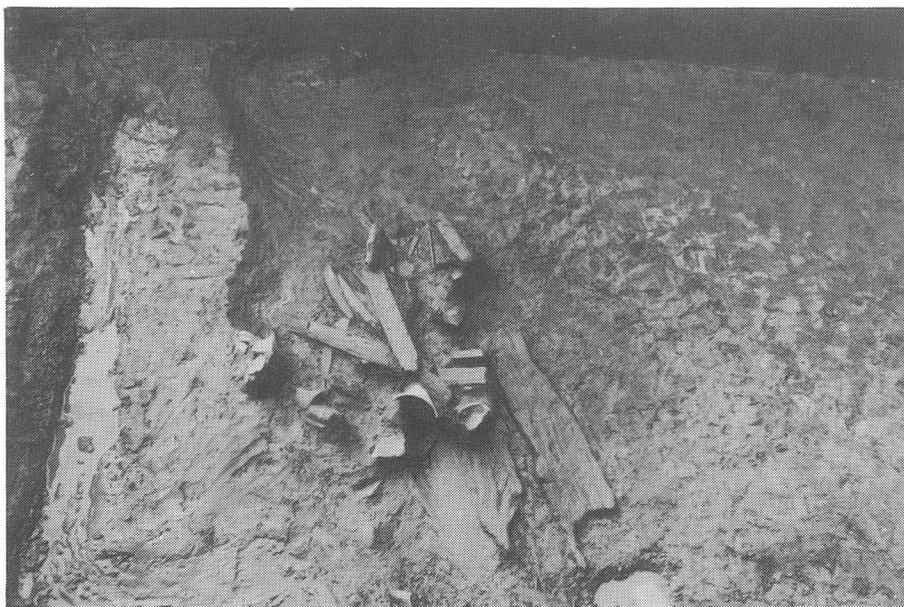
P L 14

B
ト
レン
チ



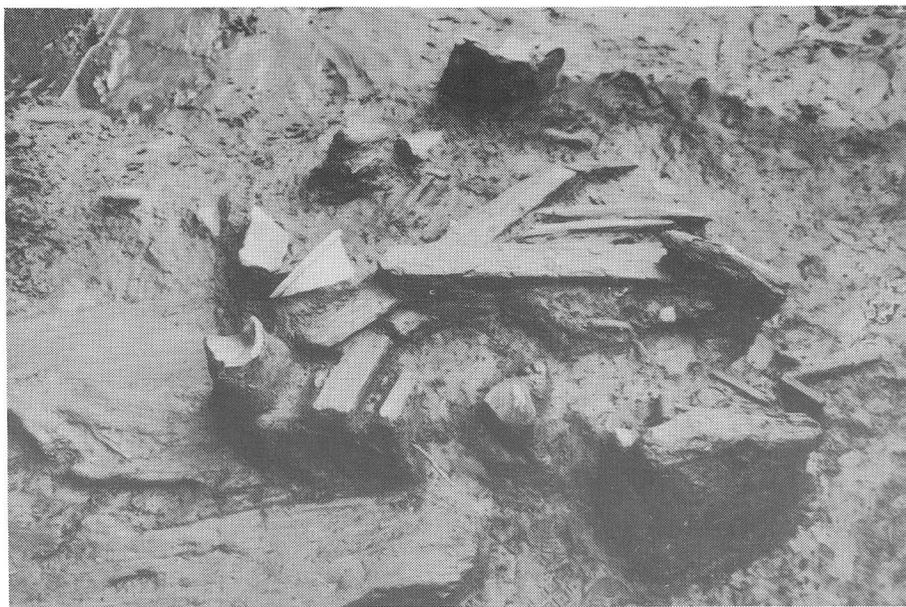
27

杭 列



28

S D 1 遺物出土状況



29

S D 1 遺物出土状況



30

B-13区 V層 椀出土状況



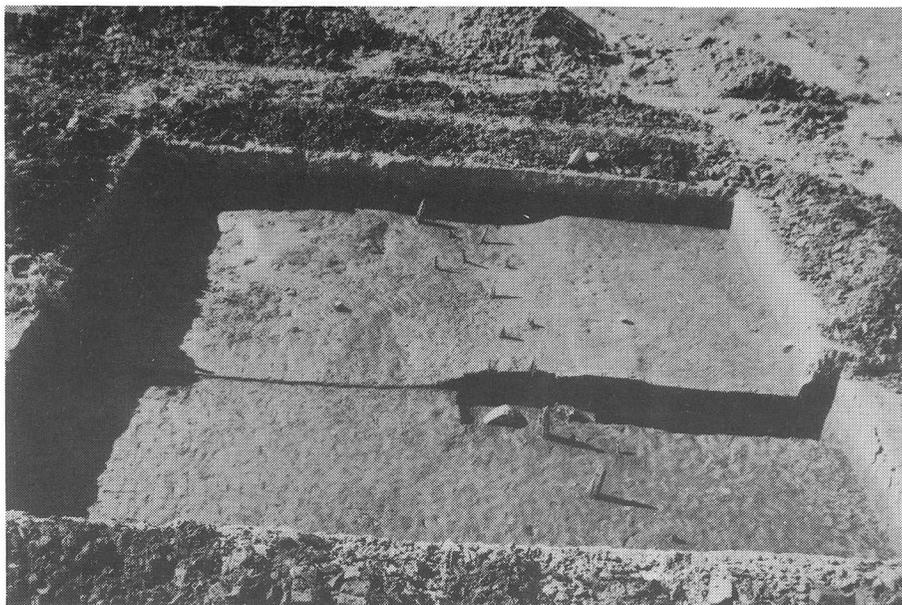
31

B トレンチ ドングリ出土状況



32

C-1.2区 完掘状況



33

C - 9.10区 VI層 完掘状況



34

C - 9.10区 VIII層 遺物出土状況



35

C-10区 VIII層 遺物出土状況



36

同 上



37

着柄鋤先出土状況



38

陽莖出土状況



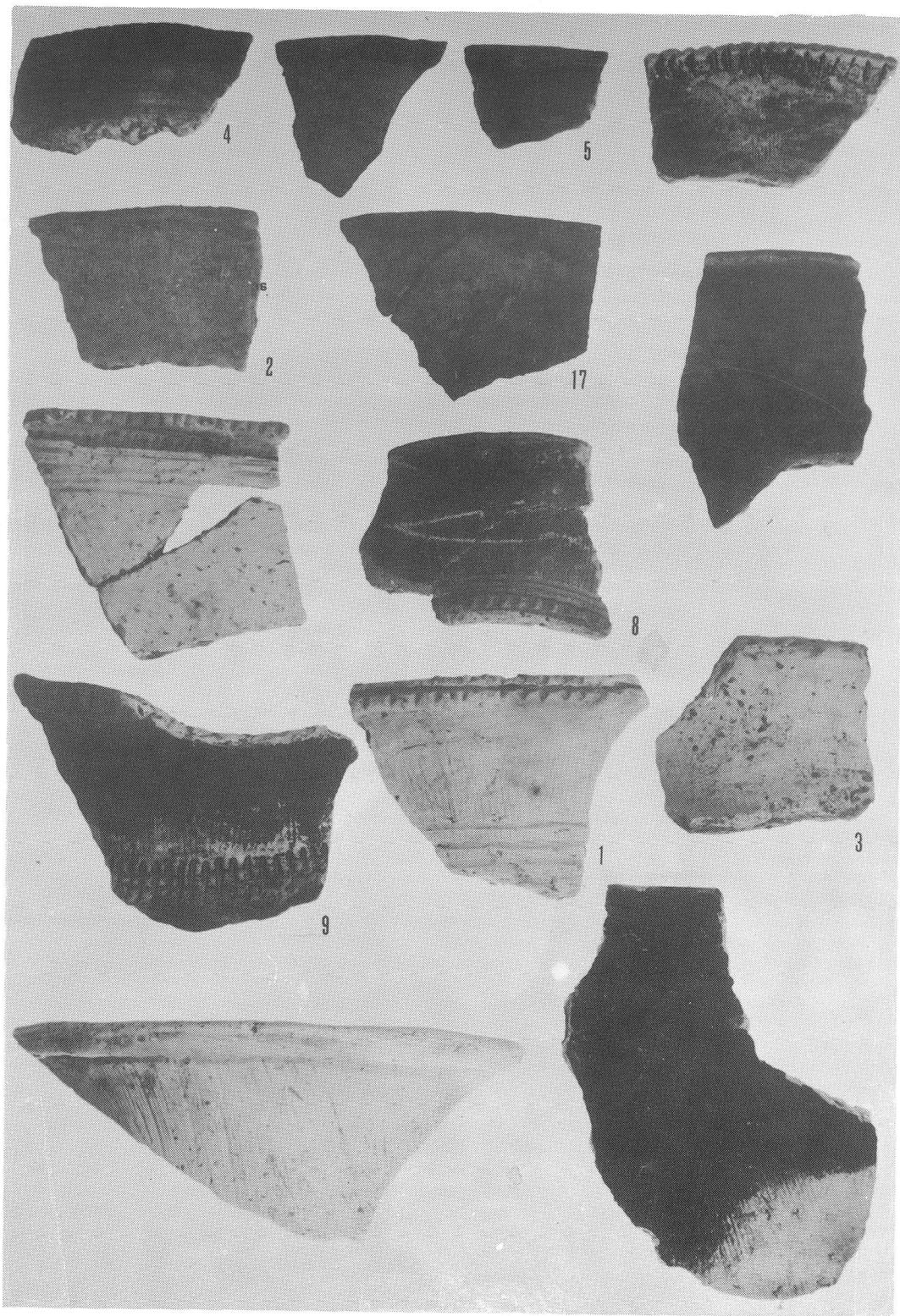
39

VIII層 遺物出土状況

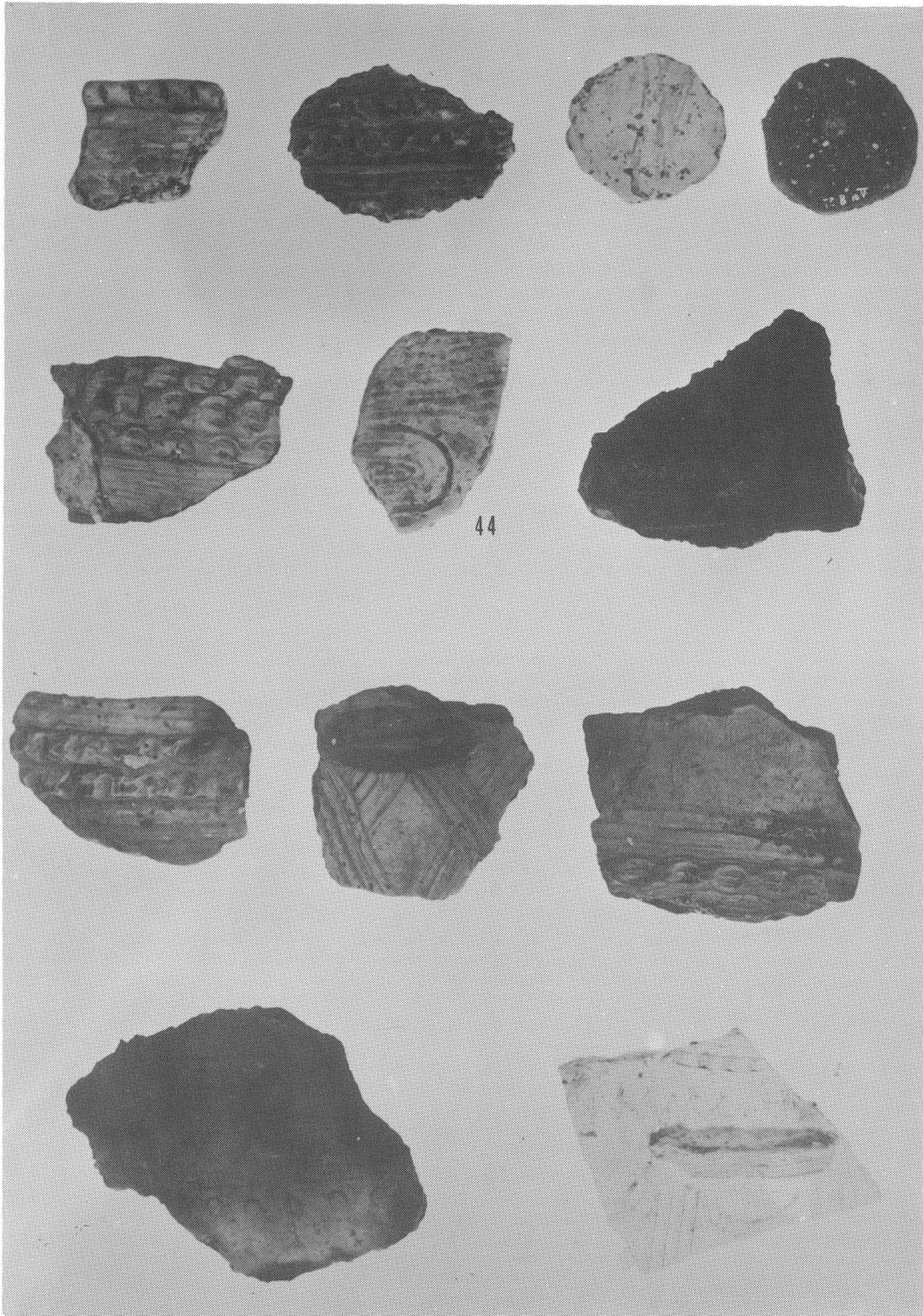


40

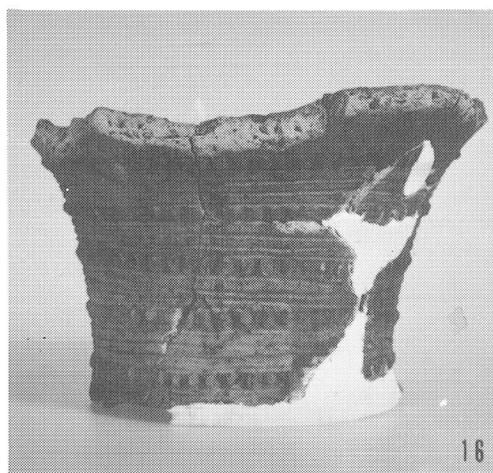
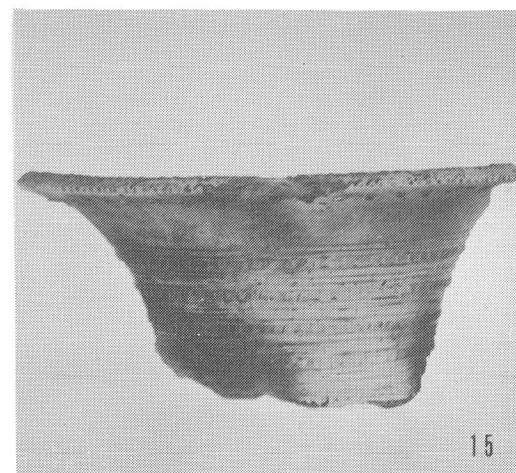
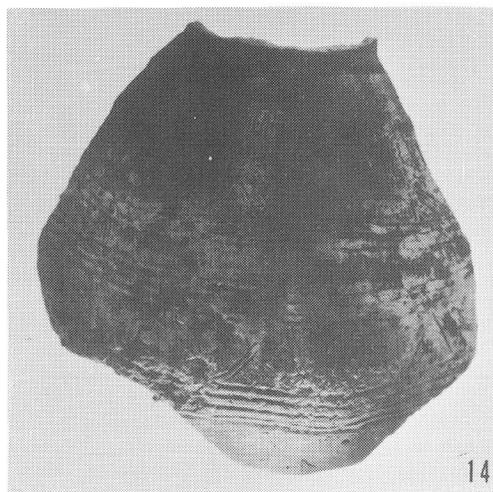
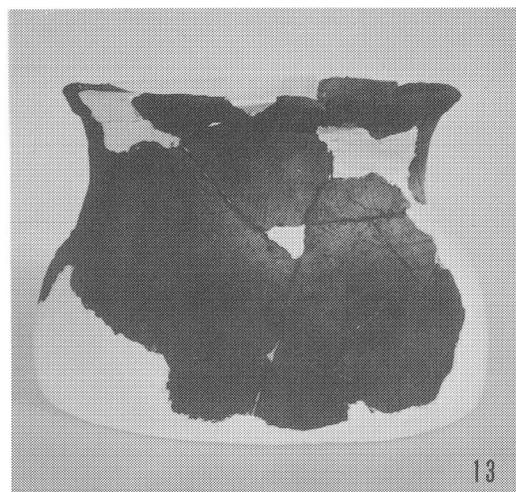
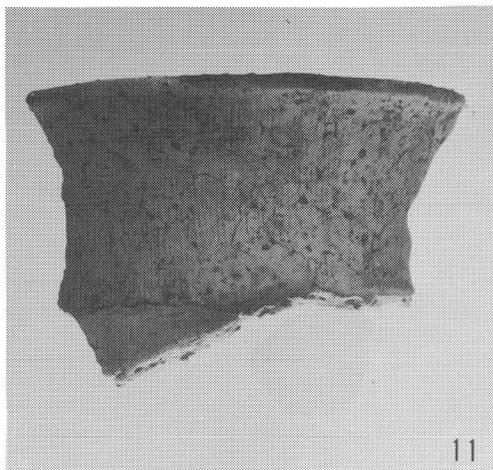
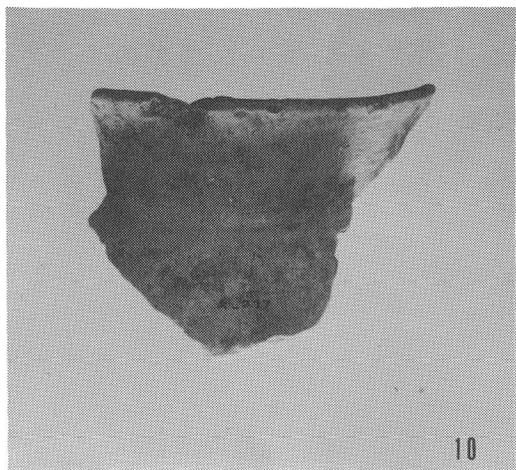
同 上 (鋤 柄)



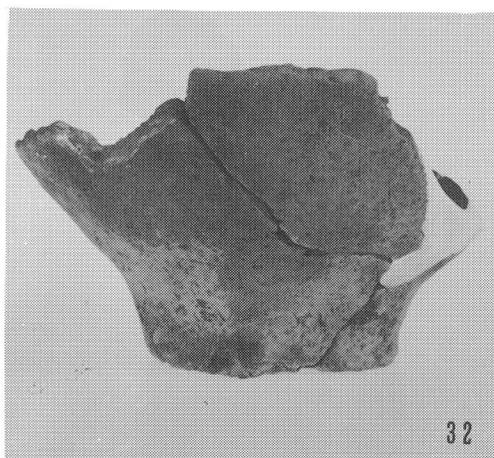
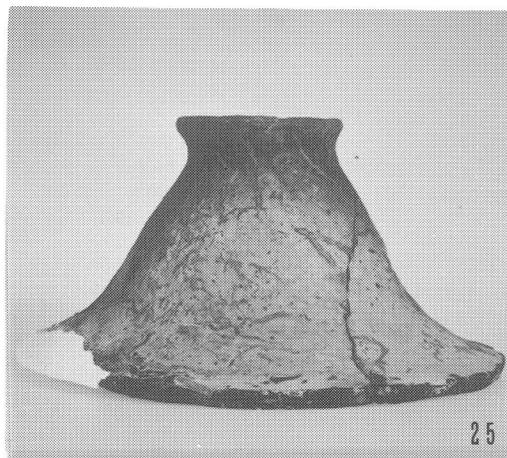
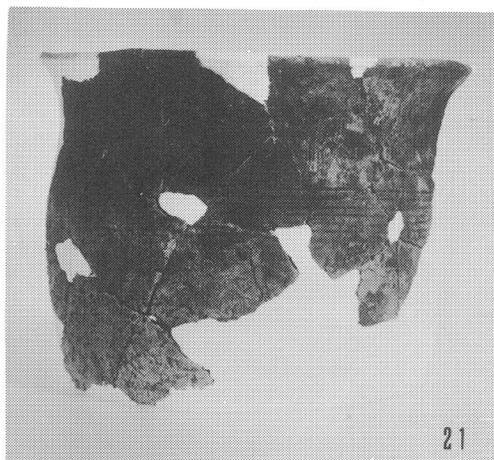
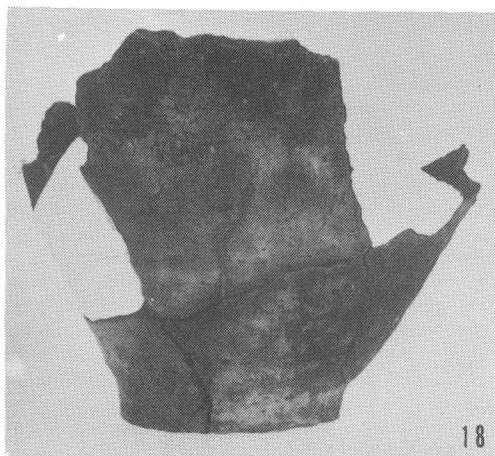
出土土器口縁部

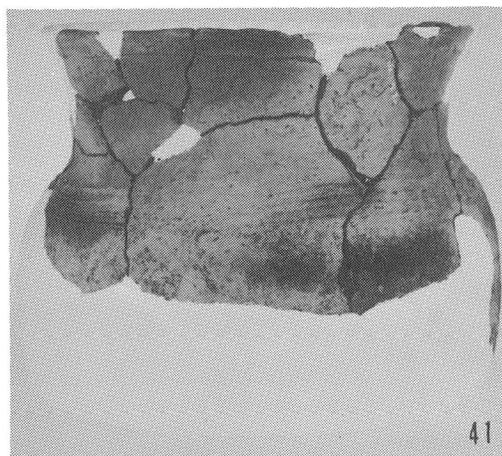
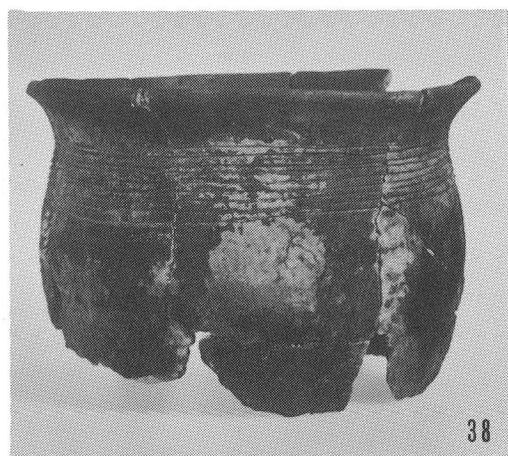
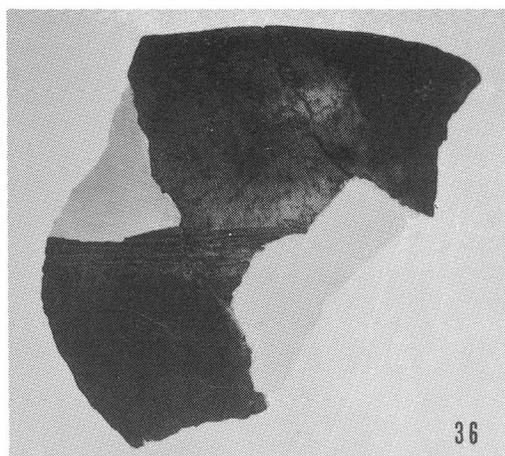


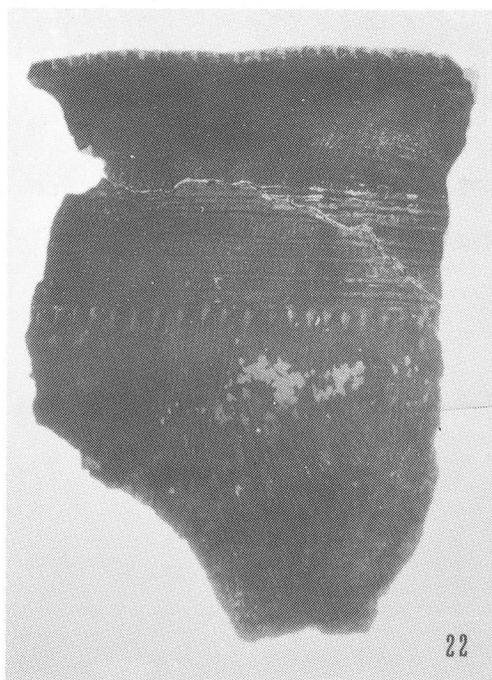
土器文様及び紡錘車未製品

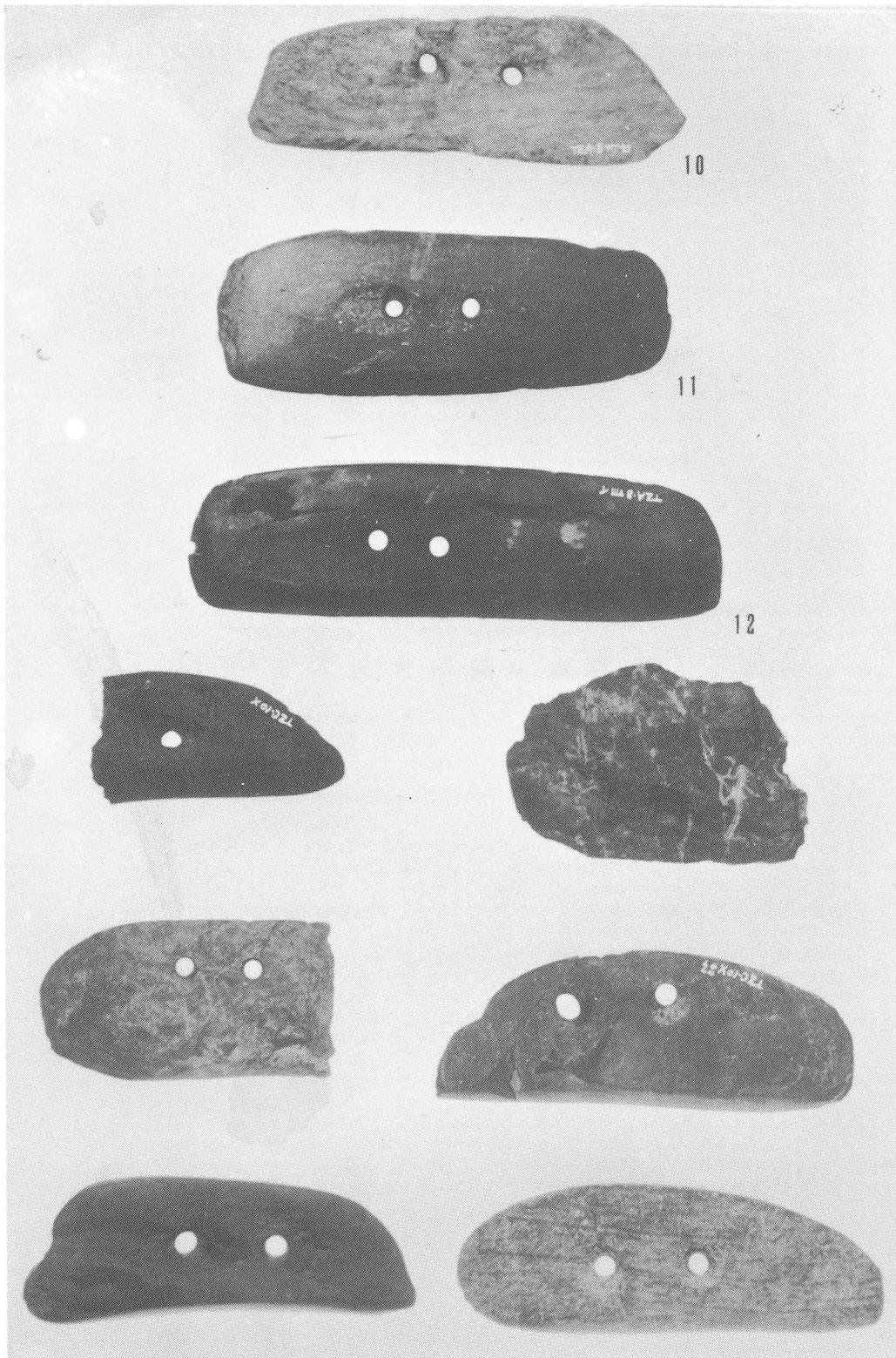


出土土器

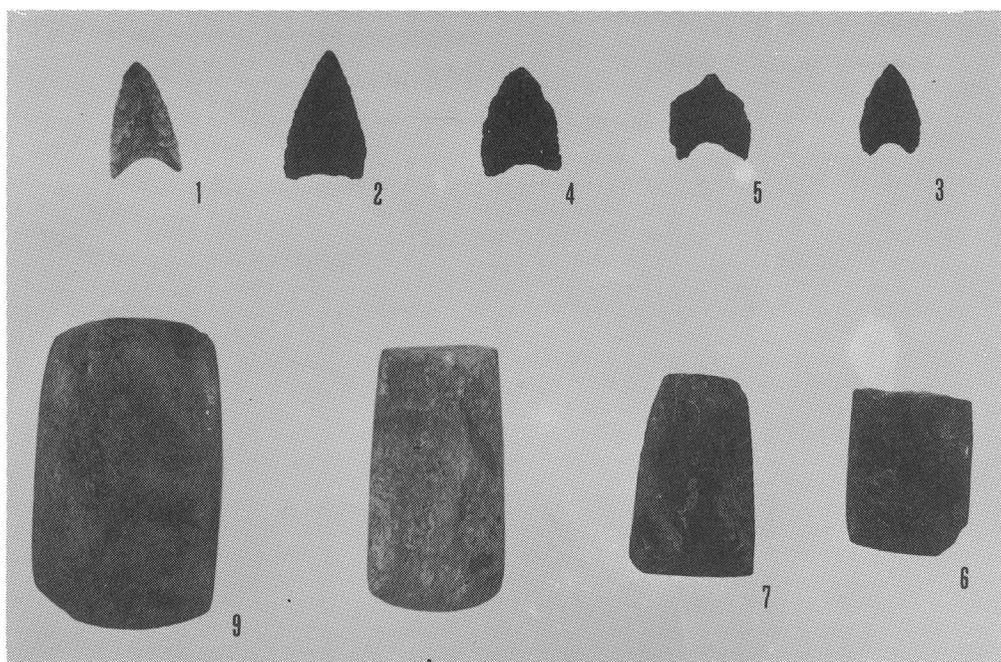




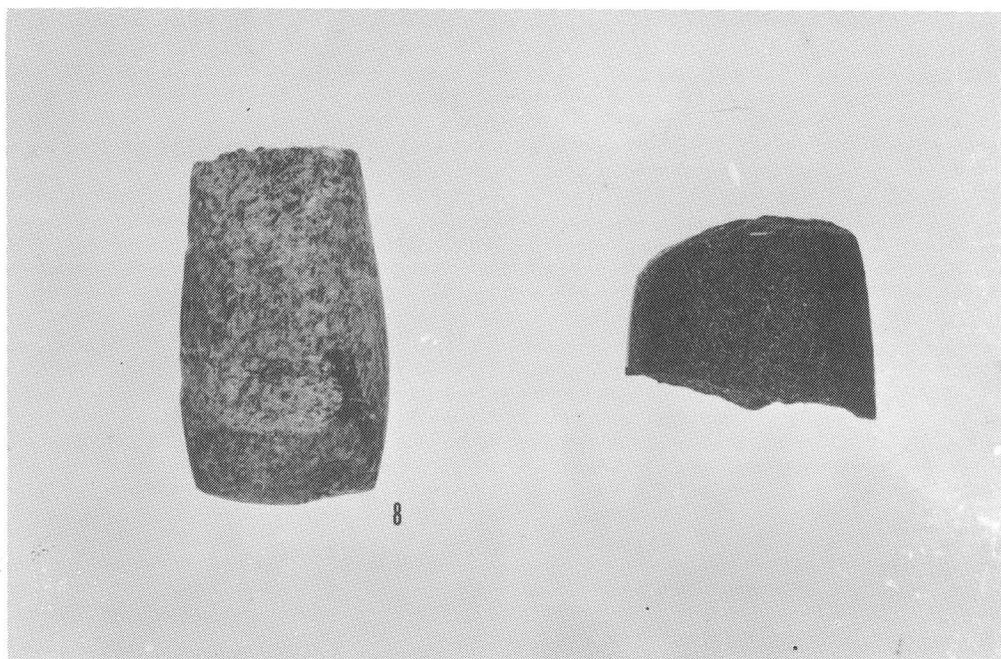




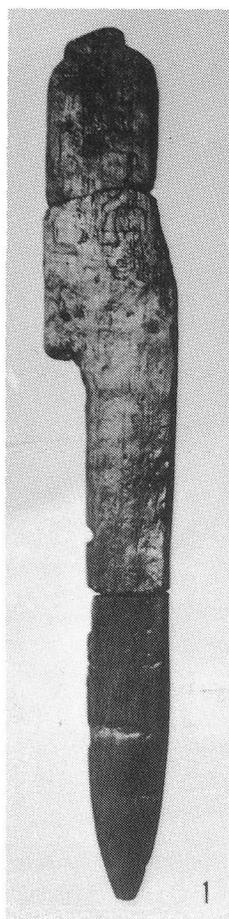
石 包 丁



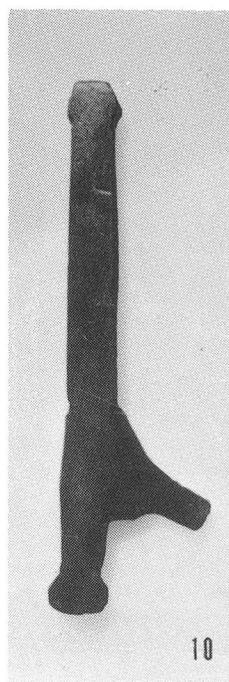
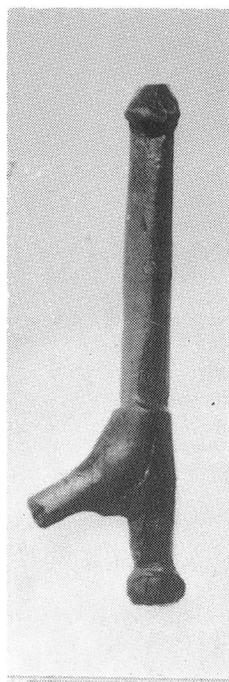
石 鏃 ・ 扁 平 片 刃 石 斧



大 型 蛤 刃 石 斧



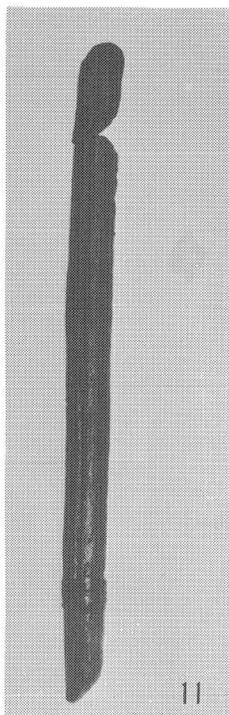
1



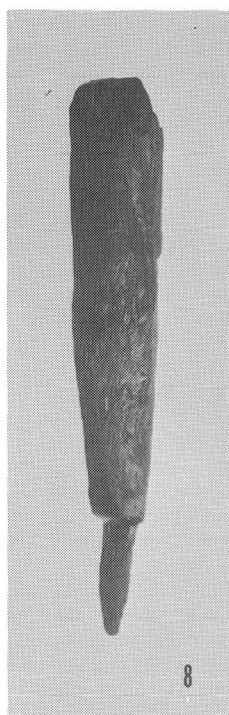
10



3

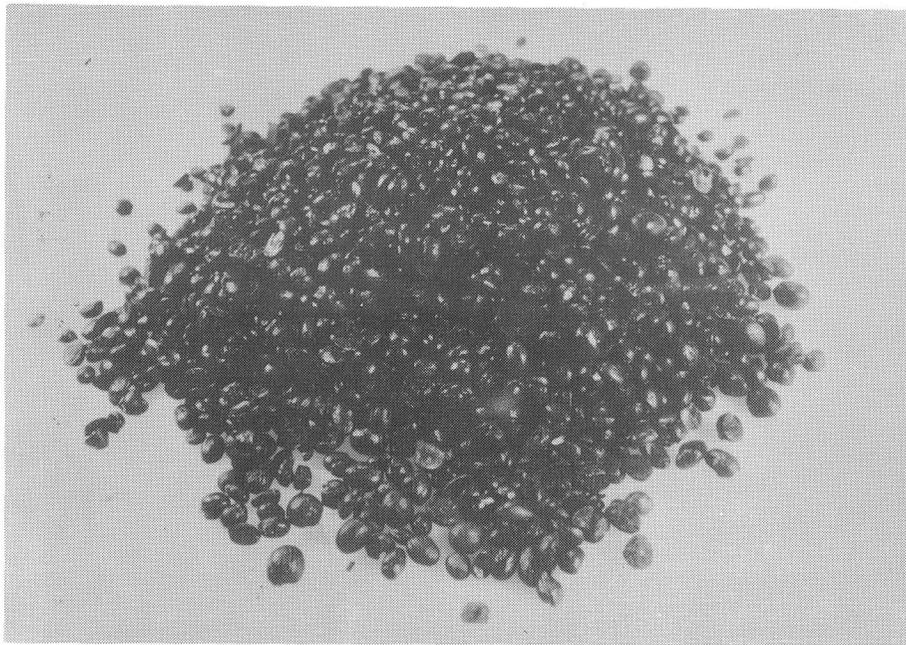


11

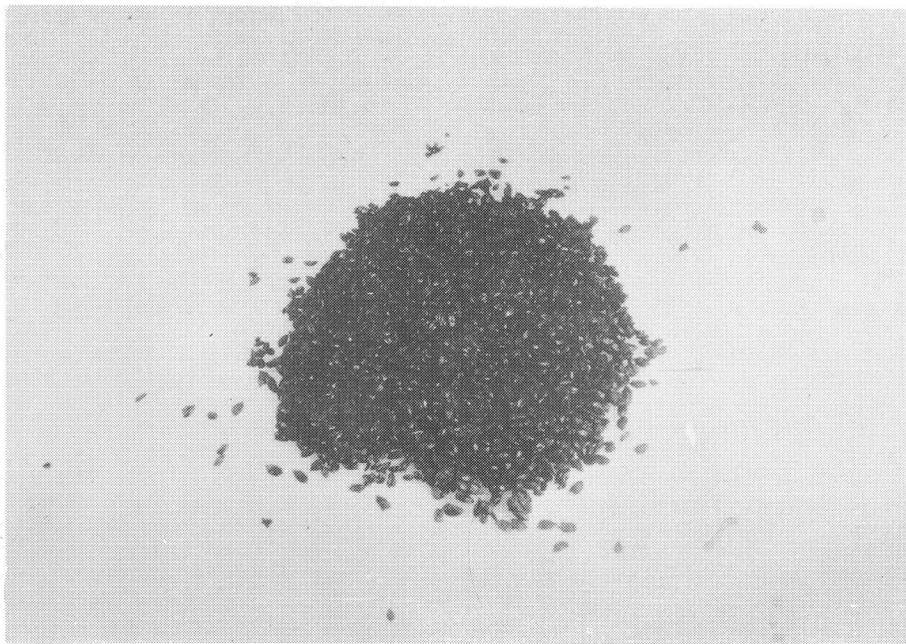


8

劍形木製品・陽莖・鋤先・弓・杵



SK3 出 土 ドングリ類



SK3 出 土 粉

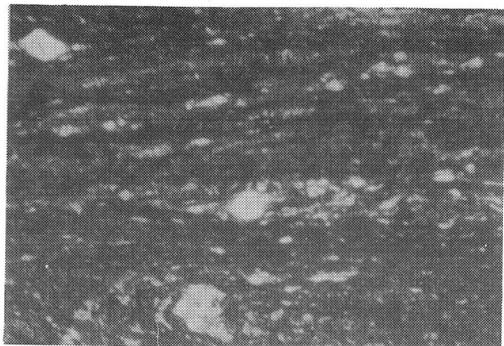


Fig 2.5-10 緑色片岩
(50倍×2) open ニコル

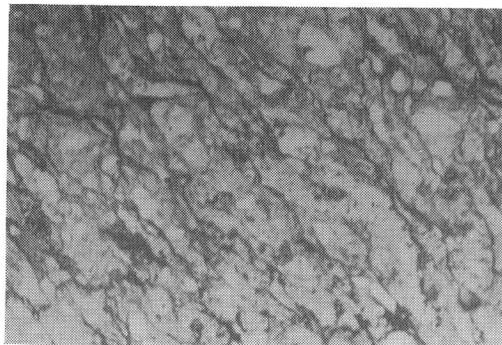


Fig 2.5-11 千枚岩
(50倍×2) open ニコル

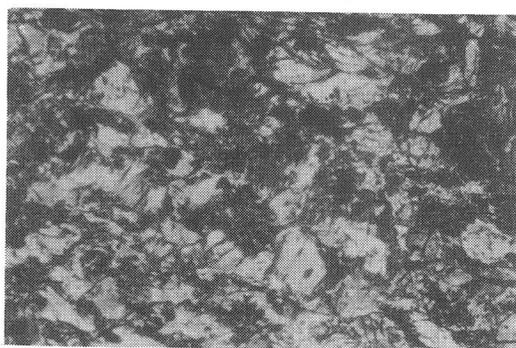


Fig 2.5-6 アルカリ角閃石岩
(50倍×2) open ニコル

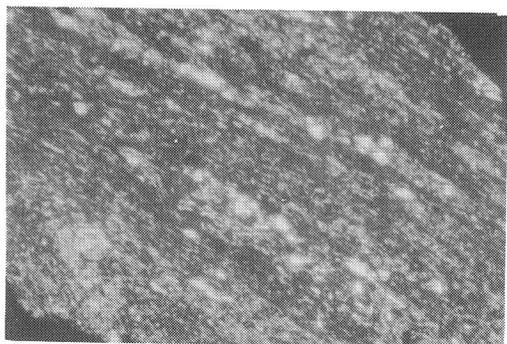


Fig 2.5-10 緑色片岩
(50倍×2) crossニコル

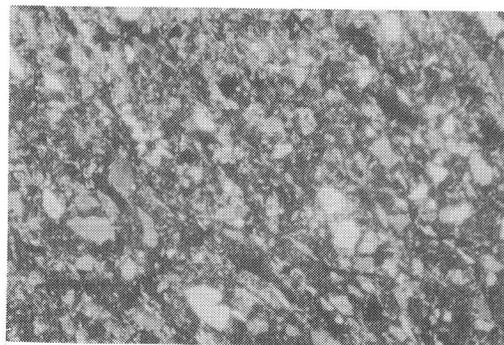


Fig 2.5-11 千枚岩
(50倍×2) cross ニコル

下分遠崎遺跡試掘調査概報

1987. 3

香我美町教育委員会

(高知県香美郡香我美町徳王子)